

自治医科大学看護学部年報

Jichi Medical University Annual Report of Nursing

第 4 号



2006

目 次

○ 特別報告

看護学部1期生の卒業に向けて

母性看護学教授 成田 伸 …… 5

附属病院看護部との共同による研究

—派遣経験が看護実践能力にもたらす教育的意義の検討—

地域看護学教授 春山 早苗 …… 7

○ 委員会等報告

人事委員会

委員長 野口美和子 …… 13

教務委員会

委員長 松田たみ子 …… 14

学生委員会

委員長 高村 寿子 …… 16

FD・評価実施委員会

委員長 野口美和子 …… 17

広報・編集委員会

委員長 渡邊 亮一 …… 19

予算委員会

委員長 野口美和子 …… 20

国家試験対策委員会

委員長 篠澤 侃子 …… 21

カリキュラム検討委員会

委員長 水戸美津子 …… 22

臨床指導者研修会

担 当 成田 伸 …… 23

○ 教育研究分野別報告

一般基礎…………… 27

専門基礎…………… 29

基礎看護学…………… 30

地域看護学…………… 33

精神看護学…………… 37

母性看護学…………… 38

小児看護学…………… 40

成人看護学…………… 41

老年看護学…………… 44

○ 研究業績録

学部長…………… 49

一般基礎…………… 49

専門基礎…………… 50

基礎看護学	50
地域看護学	51
精神看護学	51
母性看護学	52
小児看護学	53
成人看護学	54
老年看護学	55

○ 資 料

2005年度（平成17年度）年譜	59
自治医科大学看護学部の概要	59
教職員名簿	60

特別報告

看護学部1期生の卒業に向けて

母性看護学教授 成田 伸 (1期生担任)

平成18年3月10日、本学部初めての卒業生105名を送り出すことができました。卒業式終了後に同窓会設立総会を開催し、無事に同窓会も船出しました。卒業記念パーティは本学部学生ロビーで、小ぶりながらも温かみのあるものとして開催されました。卒業式前日には、卒業記念として卒業生が選んだ黒御影自然石の記念碑の除幕式を行いました。有志で卒業記念アルバムも作成しました。最終年度を迎え、最後の実習に卒業研究にと超多忙な日々の中で、クラス委員を中心に学生同士助け合い、本当によく頑張ってくれたと思います。初めての卒業までの準備には、1年を越える期間をかけてきましたので、同窓会設立が決まった瞬間は本当に感激しました。

看護系の大学では、卒業後も看護という領域の中で働くことが多く、ちょっとした疑問や臨床での悩みの解決に同期や先輩のアドバイスが役立ちます。私が卒業した千葉大学看護学部では1期生卒業時に同窓会が発足し、以来30年同窓会活動が継続し、名簿を発行し続けてきました。総会・研修会等を毎年開催し、また学部発足10周年、20周年、30周年記念式典開催を主要メンバーとして支え、卒業生同士の交流も盛んです。私自身役目を数年体験し、同窓会を維持・継続していく難しさを実感しています。しかし、同じキャンパスにしながら学生時代には知らなかった先輩・後輩や年の離れた後輩との交流も、同窓会名簿や同窓会での勉強会等を通じて始まりました。助手の採用など、人事にも大活躍です。その価値を一番に実感している一人であると思っています。

本学が初めての卒業生を出す時期が近づいた時、ぜひ同窓会を立ち上げたいと思いました。そこで、野口学部長とも相談し同窓会を設立する方向で行くことになりました。まずクラス委員にその意義を説明し賛同を得てから、クラス委員共々クラス全員に対して説明し、設立の方向で動くことになりました。

その際課題となるのが、自治医科大学附属看護学校、看護短期大学の同窓会である「さくらの会」との関係でした。現会長である大宮医療セン

ター師長の静井幸子様に成田が直接お会いし、さくらの会の現状等をお伺いしました。その後さくらの会のほうで会員向けに看護学部同窓会との関係をどうしたいかの意向調査を行って下さいました。結果は看護学部同窓会と合同でとの意向が多いものでしたが、さくらの会が既に3年以上同窓会名簿の発行を含めた活動を行なっていないことや、連絡可能な会員の割合が少ないこと等が確認でき、本学部同窓会と一緒に活動していくことの困難さを実感しました。そこで、合同で設立していくことを双方で断念し、その結果をクラス委員に伝えました。

同窓会の会則作成、会費の設定等の作業は、平成18年4月より早々に開始しました。特に同窓会の多くが入会時に高額の永年会費を払う体制である現状から、同窓会準備委員を決め、会費の資金準備のための通帳を作成し、事前に分割入金するシステムを整えました。他の同窓会を例に会則、入金のご案内等を着々と作成しました。クラス全員に向けては、3年次から同窓会設立の必要性を説明する機会を持ち、4年次には金銭管理も含めて、機会があれば担当者と担任の成田から説明しました。そして、設立総会を迎えたわけです。

看護学部校舎前庭に据え付けられた記念碑は、1期生でなければできないことをしたいとクラス委員のほうから申し出がありました。購入や設置場所等の調整は看護総務課の皆様が担当してくださいました。立派な記念碑で、また除幕式も盛大であり、卒業生の門出を祝い心にも記念として残るものとなりました。今後はこの記念碑の前で、多くの記念写真が撮られることでしょう。

卒業記念パーティの会場はぎりぎりまで調整され、最終的に学生ロビーでの開催になりました。卒業生自らの会場設営は、予想外に手間取っていました。しかし、小ぶりの会場は卒業生と学長・学部長との距離も近づけたようで、あちこちで話しの輪が出来て、和気藹々としたパーティとなりました。卒業記念アルバムは結果として有志での作成になりました。

105名という大所帯をまとめ上げていくことは

本当に大変だっただろうと思います。後輩たちのために、最初の卒業生としてできることを必ず成し遂げたいとの強い意志があつてこそ、ここまで漕ぎ着けたものと思います。

卒業までの一連の流れが、新しい伝統として伝えられていきます。1期生に引き続く学生たちにも、1期生が後輩のためにと努力したこの強い意志は伝わることでしょう。伝統を引き継ぐと共に、また新たな伝統を作り上げていってほしいと願っています。

附属病院看護部との共同による研究 －派遣経験が看護実践能力にもたらす教育的意義の検討－

地域看護学教授 春山早苗

【はじめに】

看護学は実践ありきの学問であり、看護実践において経験した知を看護学の知識とするために研究を行い、研究で得た知見を看護実践に適用・検証することを繰り返すことによって、看護実践の向上と看護学の発展が可能となる。よって、実践と研究の有機的なつながりをいかに創り出すかが重要である。

しかし、実際は実践と研究の両方を追求することは容易ではなく、困難を感じることも多い。その理由には、実践者の研究への動機づけの弱さや研究が実践と切り離され負担となっていること、支援体制も含め研究する環境が整っていないこと、教育研究者についてはフィールド確保が困難であることなどが挙げられる。

看護系大学や大学院が増加している現在、今後は実践の中で生じた疑問に対し、研究的に取り組み、対象理解を深め、より良い看護実践を展開できる実践者が増えていくことが期待される。しかし、このような状況にあっても、実践と研究の有機的なつながりを創り出し、より良い看護実践に寄与していくために、実践者が研究する上で不足していることや困難性を支援し、共同して研究していくことは、教育研究機関である看護系大学の使命であると考ええる。

【看護部との共同研究に至った経緯】

看護部では、1990年より、へき地等地域にある本学関連病院に年間約50名の看護職員を1～2年間派遣している。2004年度の派遣先は8カ所であった。県立病院が県内のへき地診療所に看護職を派遣している例は数例あるが、このような規模の看護職の派遣は全国の他の病院において類をみない。

派遣制度の主な目的は、へき地等地域の看護職の確保と看護の質向上への寄与、並びに、附属病院看護職の看護実践能力を向上させることや看護管理能力を育成することである。そのため、派遣の対象者は、看護実践経験が概ね2年以上の中堅看護職員と、看護師長や主任等の管理職としている。

これまで、派遣を経験した看護職員からは、有意義な機会だったという感想が多数聞かれていた。「経験」とは、単に時間の経過や長さを指しているのではなく、現実の多くの実践状況に出会って、あらかじめもっている概念や理論を洗練することである^{1) 2)}。そして、経験から得られた実践的知識を看護職自身が認識することが、看護専門職としての成長につながるのではないかと考える。看護部では派遣制度を本学の理念に沿った附属病院看護職の生涯学習支援の機会に位置づけたいと考えていたが、そのためには、どのような派遣による実践経験が派遣を経験した看護職員らに有意義な機会だったと言わしめているのか、を明らかにする必要がある。これは、単に感想からでは明らかにすることができない。

よって、へき地等地域病院への派遣が看護実践能力にもたらす教育的効果を明らかにすることを目的に、看護部看護職を看護学部教員が支援しながら共同して研究に取り組むこととなった。また、この研究は派遣経験者が派遣経験を振り返り、自己の看護実践能力との関連でどのような意味があったのかを考える機会を提供し、看護職としての成長を促す一助になると考えられた。

【研究の方法】

対象は、へき地等地域病院へ一定期間、派遣された経験をもつ看護職員84名のうち、研究の趣旨を説明し、同意が得られた者とした。

派遣により学習された多様な経験内容を幅広く調べることが必要であり、2回の調査を計画した。

第1回目の調査では、派遣先での看護経験の内容、派遣による学びについて、自由回答式の質問紙を用いて調べた。その記述内容から派遣看護職が自分にとって重要であった体験と認識している記述を取り出し、分類した。看護職が効果的に実践をすすめていくために身につけなければならない重要な特性は、知識、判断、スキルの3つであるといわれる³⁾。自分にとって重要であったと認識している体験は、看護実践に役立つ知識、判断、スキルの獲得、つまり看護実践能力の向上と関連

した学習体験と考えられた。この体験の分類にあたっては、平成16年3月に文部科学省「看護学教育の在り方に関する検討会」より報告された「看護実践能力の充実に向けた大学卒業時の到達目標」⁴⁾に示された5つの看護実践能力群の枠組みと、各群を構成する能力19項目を参考にした。看護実践能力は、学士課程卒業時に完成するものではなく、生涯にわたり向上するものである。よって、この看護実践能力の枠組みは、本研究においても大いに参考になるものと考えた。第1回目の調査の有効回答率は85.7%であり、学習体験は48項目に分類できた。

第2回目の調査では、自記式質問紙を用いて、第1回目の調査の結果から明らかになった48項目の経験内容について、自分の派遣経験の中で重要だったと思われるかどうかを尋ねた。調査時点で勤務している回答可能な81名を対象とし、有効回答率は70.3%であった。

第1回目、第2回目の調査共に、看護部看護職と看護学部教員との話し合いを重ねながら調査計画を立案し、調査から得られたデータの分析については、主に看護学部教員が責任をもって行った。

【研究の成果】

本研究により、附属病院看護部の派遣制度による実践経験が看護実践能力の向上に効果をもたらしていること、並びに、看護実践能力と関連した学習経験の内容が明らかになった。

重要であった学習経験で最も多かったのは「ケア環境とチーム体制整備能力」に関連する学習経験であった。これは、組織が小さく、機能分化されていない、そして看護職やその他の専門職が少ないために他職種の役割の理解と他部門との調整により、看護活動を工夫していく必要がある地域病院だからこそ経験できることであると考えられた。

次いで多かったのは「看護の計画的な展開能力」に関連する学習経験と「特定の健康問題を持つ人への実践能力」に関連する学習経験であった。これは、附属病院においても病棟異動により経験できる内容であるが、地域病院においては混合病棟が多く、また看護職を含むスタッフが少ないために、短期間で様々な成長発達段階にある対象や多様な健康レベル、並びに、健康問題を持つ対象への看護過程の展開を経験できるためであると考

えられた。詳細については、看護部長が日本ルーナリング学会の設立を記念して開催された国際研究集会において発表した⁵⁾。

研究結果から、派遣により強化・拡大できる看護実践能力と関連させて派遣制度を本学の理念に沿った看護職の人材育成におけるキャリア開発支援に位置づけていくことの重要性が示唆された。

【看護部と本研究に取り組んだ看護学部からみた意義】

実践と研究のみならず、実践と教育とのつながりも重要である。特に、附属病院看護部と看護学部は、医療に恵まれない地域における医療の確保と向上を図るという自治医科大学の建学理念の基、前者は看護活動を展開し、後者は看護職を育成すべく教育活動を展開している。そして、実際、学生の多くは、附属病院や大宮医療センターにおいて卒業後、看護実践経験を積み重ねることとなる。

本学の建学理念と看護学部の教育目的から、へき地等地域における看護に関心の高い学生もみられるが、本研究結果は、へき地等地域で働く看護職を目指すために卒業後、どのようなキャリアを積み重ねればよいか、あるいはどのようなキャリアを積む機会があるか、というキャリア・パスを示すことに役立つ。また、実践現場において、どのような看護実践体験の蓄積と看護実践能力の向上・発展が期待できるのかを理解することに役立ち、卒業後の成長を視野に入れた上で、学士課程において修得しなければならない基本的な看護実践能力を明らかにすることに役立つと考える。

【おわりに】

本研究結果からは派遣制度における課題も明らかになった。今後も、看護実践能力の向上に効果をもたらしている派遣による実践経験を参考に、課題への対策も含めて、派遣制度も含めた附属病院看護職の生涯学習支援の方法を見出すために、さらなる看護部看護職と看護学部教員の共同による取り組みが必要であると考ええる。

【文献】

- 1) Gadamer,G(1970): Truth and, method, London, Sheer & Ward.
- 2) Benner, P.,and Wrubel, J.(1982): Clinical Knowledge Development: the value of

perceptual awareness, Nurse Educator, 7, 11-17.

- 3) アーネステイン・ウィーデンバック著, 外口玉子 他訳 (1997) : 臨床看護の本質－患者援助の技術－, 第2版, 現代社, 40-48.
- 4) 文部科学省「看護学教育の在り方に関する検討会」(2004) : 看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標, 看護学教育の在り方に関する検討会報告, 平成16年3月26日.
- 5) 菊池睦子, 後藤光代, 薬真寺美佐子他 (2005) : へき地等地域病院への派遣が看護実践能力にもたらす教育的効果, 日本ルーラルナースィング学会設立記念 Rural and Remote Area Nursing国際研究集会－その実践, 教育, 研究－, 2005年4月2日.

委員会等報告

人事委員会

委員長 野口美和子

「自治医科大学看護学部教員の選考方法等に関する内規」第2条の規定により、次のとおり人事委員会が開催された。

なお、看護学部が完成する平成18年3月31日までの専任教員（助手を除く）については、文部科学省の専任教員採用等年次計画変更を考慮して選考と採用を行った。

第1回（平成17年4月1日）

- (1) 欠員が生じている領域（助教授）を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された助教授候補者1名(成人看護学領域)を選考した。
- (2) 欠員が生じる領域（講師2名）を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された講師候補者2名(成人看護学領域)を選考した。

第2回（平成17年4月21日）

- (1) 欠員が生じている領域（助手）を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された助手候補者1名(成人看護学領域)を選考した。
- (2) 平成17年度非常勤講師（2名）の任用が了承された。

第3回（平成17年5月19日）

- (1) 欠員が生じている一般基礎部門教員を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された助教授候補者1名を選考した。
- (2) 年度末の退職予定者を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された助教授候補者1名(精神看護学領域)を選考した。

第4回（平成17年5月26日）

平成17年度非常勤講師（9名）の任用が了承された。

第5回（平成17年7月19日）

平成17年度非常勤講師（1名）の任用が了承さ

れた。

第6回（平成17年9月15日）

平成18年度非常勤講師（1名）の任用が了承された。

第7回（平成17年11月17日）

年度末の退職予定者2名を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された講師候補者1名（小児看護学領域）、助手候補者1名（小児看護学領域）を選考した。

第8回（平成17年12月20日）

- (1) 平成18年度非常勤講師（5名）の任用が了承された。
- (2) 年度末の退職予定者を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された助手候補者1名（精神看護学領域）を選考した。
- (3) 欠員が生じている領域（助教授）を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された助教授候補者1名（母性看護学領域）を選考した。
- (4) 欠員が生じている領域（講師）を補充するため及び年度末の退職予定者を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された講師候補者1名（母性看護学領域）、助手候補者1名（母性看護学領域）を選考した。
- (5) 欠員が生じている領域（助教授）を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された助教授候補者1名（老年看護学領域）を選考した。
- (6) 年度末の退職予定者を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された助手候補者1名（老年看護学領域）を選考した。
- (7) 欠員が生じている領域（助教授）を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された助教授候補者1名（基礎看護学領域）を選考した。

- (8) 年度末の退職予定者を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された助手候補者1名（基礎看護学領域）を選考した。
- (9) 学部教育及び大学院教育充実のため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された教授候補者1名（地域看護学領域）を選考した。
- (10) 年度末の退職予定者を補充するため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された講師候補者1名（地域看護学領域）を選考した。

第9回（平成18年1月26日）

- (1) 平成18年度非常勤講師（6名）の任用が了承された。
- (2) 学部教育充実のため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された助教授候補者1名（基礎看護学領域）を選考した。

第10回（平成18年2月16日）

学内人事異動による欠員補充のため「自治医科大学看護学部教員の選考手続・資格基準規程」に基づき申請書類が提出された助手候補者1名（小児看護学領域）を選考した。

第11回（平成18年2月23日）

平成18年度非常勤講師（3名）の任用が了承された。

教務委員会

委員長 松田たみ子

教務委員会は、毎月第2木曜日の13時15分から定例委員会の開催日として、17年度の定例開催は8月を除く各月に開催し11回であった。臨時委員会は4回（5月・8月・9月・3月各1回）開催した。委員の構成員には変更は無く、一般教育1名、専門基礎科目1名、看護学の各領域より1名の9名である。教務委員会が管轄する事項の運営は、教務委員と教務委員以外の教員を含めたワーキンググループで役割分担をして実施した。このワーキンググループの教務委員の役割分担と構成員の交替

は一部あり、表1に17年度の教務委員会の構成と役割分担および担当者について示した。

17年度教務委員会での主な審議内容は表2に示すとおりである。平成17年度は学部完成年度に当たり、教務委員会の所轄事項である、学科課程、授業及び試験に関する事項について4学年が揃った形での運営となった。新入生は4回生が入学し、編入生も1回生9名が4学年、2回生10名を3学年に迎え入れた。

4年次生の授業科目は初めての開講であった。4年次の前学期は保健医療関係法規、家族生活援助論、地域保健論、保健福祉行政論、健康教育論、地域看護活動論、看護政策と地方自治の7科目と地域看護学実習が必修科目として開講された。また、選択科目は保健・看護研究セミナー、ターミナルケア、助産師国家試験受験資格に関連する6科目の計8科目が開講された。

後学期の必修開講科目は卒業研究1科目、選択科目は国際看護活動論、助産学実習の2科目が開講された。卒業研究は後学期の必修科目であるが、4月に担当教員を決定し、前学期から自主ゼミの形式でグループ毎に準備をすすめ12月冬季休業前までに提出、グループ単位での発表会を実施し、全員の抄録集を印刷して学生個人に配布した。

編入生は、一括認定及び個別認定される単位とあわせて、2年間で卒業要件を満たす単位の履修が可能のように、編入生履修指導委員が個別指導を行い、2年間の履修科目を見通して決定してスタートした。編入3年次は1年次から3年次までの開講科目のうち、認定科目以外の必要単位を卒業要件が満たされるように履修する必要があるため、授業時間の変更の際、特に必修科目の授業の時間割の重複が生じた事があり、調整が必要であった。4年次生は4年生に開講される科目の履修が主となり、スムーズに履修された。編入生の一括認定および個別認定以外の既修得単位の認定についての申請は、本年度はなかった。

実習科目の実施に関しては、受け入れ施設との事前打ち合わせが必要であるが、今年度から、より効果的できめ細かくまた効率的に打ち合わせをするために、すべての実習を一度に行う説明会方式を変更して、実習を担当する領域毎に当該病院・病棟と打ち合わせをもつという方式でおこなった。

助産師国家試験受験資格の修得に関連する科目（4年次開講）の選択者の決定は、昨年度作成し

た「選択学生選考の決まり」に基づいて、選択履修する15名の学生を決めた。

1回生を最初の自治医科大学看護学部の卒業生として送り出す年度であることから、学長の特別講義を後学期の開始の時期に行った。今後、このような機会をどのように設けるか検討が必要である。

学生の入学、退学、休学等に関する事項では、4月の委員会において、前年度休学の2年生1名の退学について審議した。5月には1年生1名の休学申請があり、臨時教務委員会で審議した。10月の委員会で、4年生1名の休学について審議し、3月の臨時教務委員会において同4年次学生の休学期間の延長および、5月より休学していた1年生1名の復学について審議した。

定期試験に関する昨年度の課題であった3年生のフィールド実習の期間中に1・2年生の定期試験期間が設定されていた事による編入生の履修上の重複については、後期の定期試験を全学年（1～3年生）1月下旬のフィールド実習開始の前に終了するように年間計画を立て、解決する対応を取った。これによって、2月から3月の試験後の処理などのスケジュールにゆとりができた。

図書の整備や図書の利用に関する事項では、購入図書・雑誌のアンケート調査を行い購入図書の決定について審議した。また、その他、新入生への図書館利用ガイダンスおよび2年生への文献検索ガイダンスを、図書館運営委員と図書ワーキンググループが中心となって行った。

科目等履修生の応募は、前学期・後学期とも本年度の応募はなく、審議事項にはあがらなかった。

表1 平成17年度教務委員会 役割担当

役 割	担 当 者
委員長	松田たみ子
副委員長・時間割	川口 千鶴
実習病院等連絡調整	水戸美津子, 春山 早苗
学年担任	1年生：高村 寿子, 真砂 涼子 2年生：川口 千鶴, 里光やよい 3年生：水戸美津子, 水野 照美 4年生：成田 伸, 春山 早苗
編入生単位認定・履修指導	成田 伸, 西岡 和代, 水野 照美, 鈴木久美子
図書ワーキンググループ	永井 優子, 高村 寿子, 岸 恵美子, 朝野 晴美, 山本 洋子, 亀田 真美
既修得単位認定ワーキンググループ	高村 寿子, 竹田 俊明, 松田たみ子
講義・実習予算ワーキンググループ	渡邊 亮一, 竹田津文俊, 成田 伸

表2 平成17年度教務委員会議題

回	年月日	審議事項・報告事項
1	平成17年4月14日	・学生の退学について ・教務委員会年間スケジュール確認 ・編入生の単位認定・履修指導 ・履修届について ・補助科目責任者について ・実習計画策定費の執行状況 ・臨地実習連絡調整担当の報告について ・3年生学年担任よりの報告について
2	平成17年5月13日	・前学期履修申請状況 ・講義・実習予算配分
臨1	平成17年5月25日	・学生の休学について
3	平成17年6月9日	・平成18年度時間割作成準備 ・講義・実習予算配分 ・特別講義の日程 ・学生便覧の見直しについて ・前学期定期試験に向けての学習環境の整備 ・図書等について
4	平成17年7月14日	・前学期定期試験について ・特別講義について ・平成18年度学年暦について ・平成18年度時間割・シラバスについて ・学生便覧の見直しについて ・学年担任よりの報告 ・図書について
臨2	平成17年8月3日	・追試験（追実習）について
5	平成17年9月8日	・再試験・追試験について ・平成18年度学年暦 ・実習評価の発表について ・平成18年度時間割 ・平成18年度授業関係予算要求 ・図書について
臨3	平成17年9月22日	・前学期単位修得状況 ・平成18年度授業関係予算要求
6	平成17年10月13日	・学生の休学について ・後学期履修申請状況 ・平成18年度時間割 ・図書について ・学生便覧の見直しについて
7	平成17年11月10日	・平成18年度時間割 ・シラバスの修正 ・実習について（平成18年度の実習依頼）
8	平成17年12月8日	・後学期定期試験日程 ・卒業研究について ・シラバスの修正について ・図書について ・インフルエンザ発症時の対応について
9	平成18年1月12日	・平成18年度時間割 ・実習要項の作成について
10	平成18年2月9日	・4年生の卒業認定のための単位取得状況 ・追試験について ・平成18年度時間割 ・平成18年度オリエンテーション ・学年カラーについて
11	平成18年3月9日	・追試験・再試験の日程 ・3年生の前学期実習 ・助産師国家試験受験資格関連選択科目履修 ・平成18年度編入生単位認定・履修指導の準備 ・図書について
臨4	平成18年3月23日	・進級の認定について ・学生の復学・休学について ・4年生の後学期単位履修の確認

学生委員会

委員長 高村寿子

本学部が開設されて4年目を迎え、かつ3年編入生も2回生を迎え、全学年が揃ったことになり、平成17年4月1日で在学学生4学年あわせて総勢418名となった。各学年それぞれ学年差はあるにしても、現在の生活や将来の進路への不安や悩みやストレスを抱える学生もみかけられるので、彼らを支える学生委員会の果たす機能・役割、なかでも学生の厚生補導に関する事項、学生相談・進路相談、特に就職相談などに関するきめ細やかな対応を強化した。とくに最終学年の4年生は就職と、4年間の学習の総決算としての卒業研究と国家試験を控えていることから進路プロジェクトチームが一丸となって取り組んだ。

平成17年度の学生委員会は、表1のように第1回を4月7日に開催し、8月の夏期休暇を除き、計11回開催した。委員会の構成委員は、前年度と同様、表2に示すとおりである。この他に、表1の脚注に示すように学生委員1名、学生委員以外1名の計2名の寮務主事および学生サポートチーム6名と、進路プロジェクトチーム6名が、学生生活が円滑に送れるように厚生補導に関する事項や将来の進路への不安や悩みの相談・解決のために積極的に活動した。

審議・報告された議題は、表1に示すとおりである。本学部が開設されてから継続審議・検討されてきた学生の健康管理とこころの相談システムに関しては、健康診断などの受診記録をファイルできる健康手帳の作成・配布、本学部内こころの相談室の設置など、一定のシステムが構築された。また、学生への経済的な支援として、日本学生支援機構の奨学金や自治医科大学看護学部奨学金制度の積極的な活用支援を継続した。

学生寮関係では、旧寮から新寮への引越しがスムーズに完了したことを踏まえて、寮規程の一部改正を審議し寮務主事制度を廃止した。その代りに寮担当を選出し、寮自治会への支援を継続し、防災訓練の実施などの指導・助言を行った。

今年度からの新規事項として、各種ハラスメントのガイドラインおよびマニュアル作成を目指して、5名のメンバーからなるワーキングチームを組織し、作成に向けて審議を開始した。3月末に

各種ハラスメント防止に関するリーフレットを作成し、在学生には3月に、平成18年度新入生には4月のオリエンテーション時に配布することにした。また、ハラスメント窓口相談員を4名選出し、メールアドレスを取得するなど、相談活動に向けて準備を整えた。

さらに、充実して快適な学業や部活動などの学園生活が送れるように支援する学生サポートチームと協力しながら、11月に看護学部学生自治会を発足させ、発足後は自治会活動がスムーズに運営されるよう、自治会室および掲示板などの設置に協力し、支援を行った。

また、進路プロジェクトチームは、平成17年3月にはじめての卒業生を送り出すために、自治医科大学附属病院看護部および大宮医療センター看護部と連携し、学生サロンに進路情報コーナーを設置し、進路ガイダンスを開催した。はじめての卒業生の進路状況は、表3のとおりである。さらに、学部としてはじめての学長賞を選出した。また、同窓会の設立に関して協力・支援していくこととした。

表1 平成17年度学生委員会審議一覧

月 日	審議・報告事項
平成17年 4月7日	・学生委員会の役割分担について ・新入生オリエンテーションについて ・相談ルームについて ・進路プロジェクトチームの報告について ・入寮状況及び寮規程の改正について
5月12日	・学生役割分担について ・学生寮の防災訓練マニュアルについて ・進路プロジェクトチームの報告について ・学生寮規程について
6月2日	・学生サポートチームの報告について ・寮懇談会の報告 ・学生寮規程の改正について
7月7日	・夏期休暇中の自主研修及び海外渡航について ・学友会幹事会の報告及び学園生活における部活動のあり方について ・学生健康保険組合理事会の報告について ・学生寮規程の改正について ・看護学部感染症予防対策について ・各種ハラスメントのマニュアル作成について ・就職説明会について
9月8日	・夏期休暇中の自主研修及び海外渡航について ・各種ハラスメントのマニュアル作成について ・学生寮規程の改正について
10月6日	・感染症予防対策について ・各種ハラスメントのマニュアル作成について ・学生寮規程の改正について
11月10日	・学長賞について ・各種ハラスメントのマニュアル作成について ・寮の閉鎖期間における在寮について ・学生寮規程の改正について ・インフルエンザの対策について ・学生サポートチームの報告について ・寮の防災訓練について

FD・評価実施委員会

委員長 野口美和子

12月1日	・学生寮規程の改正について ・各種ハラスメントのマニュアル作成について ・健康管理について ・寮の防災訓練について ・学生自治会の発足について ・学長賞について ・年末年始の在寮希望調査について
平成18年 1月5日	・各種ハラスメントガイドラインについて ・学長賞の選考基準について
2月2日	・学長賞について ・各種ハラスメントガイドラインについて ・学生自治会室及び掲示板の貸与および同窓会 室の設置について ・進路ガイダンスについて ・健康管理について
3月2日	・各種ハラスメント防止に関するリーフレット について ・新入生オリエンテーションについて ・寮の防災訓練について

Ⅰ. はじめに

所轄事項は学部の教育内容等の改善のための組織的な研修および研究の実施に関することであり活動方針は以下の通りである。

1. 教育評価に関する事項

- (1) 学部カリキュラムの評価に関すること
- (2) 学生の到達度成績評価, 教員の授業評価 (学生および第3者による評価) に関すること
- (3) 教育方法教育環境の改善に関すること

2. 教員の資質開発に関する事項

- (1) 授業技法の改善の具体的検討に関すること
- (2) 教員研修会の企画, 実施に関すること
- (3) 授業技法評価に関する教員セミナー等の計画に関すること

表2 平成17年度学生委員会の構成および役割

委員氏名	領域	役割
高村 寿子	一般教育	委員長・奨学生選考担当
竹田 俊明	専門基礎	学生健理事
松田たみ子	基礎看護学	
篠澤 侑子	地域看護学	副委員長・寮務主事
永井 優子	精神看護学	保健委員
成田 伸	母性看護学	
川口 千鶴	小児看護学	奨学生選考担当
中村 美鈴	成人看護学	寮務主事
水戸美津子	老人看護学	進路プロジェクトチームリーダー

*寮務主事：篠澤侑子（地域看護学），中村美鈴（成人看護学）

*学生サポートチーム：

春山早苗（地域看護学），西岡和代（精神看護学），
水野照美（成人看護学），高木初子（老年看護学），
真砂涼子（基礎看護学），里光やよい（基礎看護学）

*進路プロジェクトチーム：

水戸美津子（老年看護学），春山早苗（地域看護学），
大原良子（母性看護学），亀山直子（老年看護学），
川上 勝（基礎看護学），村上礼子（成人看護学），

*ハラスメントガイドライン作成ワーキングチーム：

中村美鈴（成人看護学），真砂涼子（基礎看護学），
山本洋子（成人看護学），西岡和代（精神看護学），
高村寿子（一般基礎）

*ハラスメント窓口相談員：

高村寿子（一般基礎），川上 勝（基礎看護学），
奈良岡功（看護学務課），学生相談ルームカウンセラー

表3 卒業生の進路状況

就 職	自治医科大学附属病院	34人
	自治医科大学大宮医療センター	25人
進 学	その他の就職先	40人
	養護教諭	1人
	その他	5人
合 計		105人

Ⅱ. 委員会議事録

第1回（平成17年4月21日）

- (1) 平成17年度前学期授業研究会の準備について

プログラム案を検討した。平成17年8月31日（水）本学大教室3にて開催すること，4年前期開講科目についての発表を行うことが承認された。会後半のあり方について討議し，講演と質疑応答を行うこと，テーマとして「アカデミックハラスメント」をとりあげることが承認された。講師は教育学など一般教育の分野から人選，依頼していくこととなった。

- (2) 平成16年度授業研究会報告書の発行について

- ① 基本的な報告書原稿と授業評価結果とりまとめの原稿がそろっていることを確認した。
- ② 後期授業研究会の質疑応答の記録およびグループ討論の報告について原稿提出状況を確認し，とりまとめていくこととした。

- ③ 平成15年度報告科目の16年度における自己課

題の改善状況について報告をとりまとめて掲載する。

- (3) 学生による授業評価の活用, 自己点検の分析について

表記について, 結果を教員がどう受け止め, 授業の自己評価, 自己点検にどれだけ, どのような形で活用しているかを見るにはどのような方法があるかを検討すべきということが提案された。水戸委員, 松田委員, 竹田副委員長のグループで次回委員会までに検討することとなった。

- (4) その他

今後の本学 FDのあり方, 方向性について次回以降検討していくこととした。

第2回 (平成17年9月15日)

- (1) 学生授業評価の分析活用について

教員の自己評価と授業改善努力に生かしている状況を把握していくこととし, 既存の資料の調査を行って評価の方策を見出していく。(担当 竹田副委員長)

- (2) 今後の委員会活動について

- ① 後期授業研究会のあり方

卒業研究と助産実習が主となるが, 研究については各領域毎の報告と討議を行う方針としたため, 講師を招いての講演などを行う余地はないと判断された。卒業研究の扱いについて, 目標をどう立て, 各学生がどうクリアしていったかを具体的な研究事例に即して発表するのが望ましいとの意見が出されたが, プログラムや進行に関して詳細を松田委員が検討していくこととした。

- ② 今後のFD活動について

授業研究会を中心とするこれまで4年間の当委員会活動の評価を行い, 今後の方針を立てる参考とするため, 教員アンケートを実施することとした。

大項目として以下の2点があげられ, 質問文は川口委員, 水戸委員で考案し, 実施は後期授業研究会開催時(または直後)が適当とされた。

- ① 本学部におけるFDの目標(平成14年度に提示)と照らして, 授業研究会などの目標達成を検討するためのアンケート内容
② 今後のFD委員会の活動として望むものを尋ねる内容

第3回 (平成17年11月10日)

- (1) 授業改善への取り組み状況調査について

- ① 教員自己評価票を資料とするもの(平成16年度後期, 平成17年度前期)

- ② 授業研究会での自己課題を資料とするもの(平成14~15年度発表科目)

上記2項目についてとりまとめの報告があった。原案を改訂し, 3月の委員会で承認後, 授業研究会での学内公表, 年報への掲載, 自己点検評価での提示などを行っていく。

- (2) 後期授業研究会での「卒業研究」の発表形式について

- ① 各領域(7領域)で発表することで打診, すでに了解されている。

- ② 卒業研究に関わる授業評価票

原案が提示され検討した。今後教員懇談会で周知していく。

- (3) FD委員会の4年間の活動の評価について

後期授業研究会の折りに教員へのアンケート調査を行うこととした。アンケートの文案について検討を行った。

- (4) その他

日本看護系大学協議会, ファカルティ・ディプロップメント委員会におけるFD推進会議へのアンケート回答と会議出席について

- ① 「ファカルティ・ディプロップメント(FD)研究能力開発についての調査」に対して, 委員会として回答することとした。

- ② 「看護教員の研究能力を高めていくためのFD活動のあり方について」ブロック会議が12月3日に聖路加看護大学で開催されるので, 出席者を検討した。

第4回 (平成18年3月9日)

- (1) 後期授業研究会について

- ① プログラム

平成18年3月24日(金)開催予定の今年度後期授業研究会の準備に関し, プログラムなどを確認した。

- ② アンケート

主要な活動である授業研究会および今後のFD活動について教員へのアンケート調査を行うこととしていたので, アンケート案を検討した。配布は研究会当日の冒頭で行うこと, また回収は終了時に行うことが確認された。その際, 研究会の趣旨に照らしてアンケートに答えて頂くために, 授業

研究会の趣旨および本学部FDの方針についての書面を配布することとした。

結果は平成17年度授業研究会報告書に掲載し、年報でも報告していくこととした。

(2) その他、今後の作業

① 前回の委員会で提示された学生授業評価活用状況の最終版(資料1)が示され、今後の対応としては、平成17年度授業研究会報告書に掲載すること、大学の自己点検・評価の平成18年度中間報告書に進捗状況を記載することが確認された。

② 授業研究会での各科目発表で示された自己課題について次年度にどう対応されたかの評価を行ってきたが、2年分(H14年度開講科目のH15年度における対応、H15年度開講科目のH16年度における対応)のとりまとめができたので(資料2)今後授業研究会報告書に掲載していくこととした。

③ 本学部年報第4号(2005年度)への本委員会平成17年度活動報告については委員長と副委員長とで対応していくこととした。

資料1

平成16年度後期			
科目数(専任)	16科目		
のべ担当者	33名		
評価活用*	+	24名	72.7%
	-	9名	27.3%
	* 学生評価の活用～学生による授業評価が教員の自己評価票に反映されているか？		
平成17年度前期			
科目数(専任)	21科目		
のべ担当者	39名		
評価活用*	+	29名	74.4%
	-	10名	25.6%
	* 学生評価の活用～学生による授業評価が教員の自己評価票に反映されているか？		

資料2

平成14年度開講科目			
科目数17(専任)			
延べ課題項目数	48		
平均項目数	2.8/科目		
評定*	割合	カウント	次年度における自己課題の取り組み
F	10.4%	5	[評定] 解決：F、進展あり：P、進展無し：NP、記載なし：Nd、教員の交代：Nc、解決をカリや学生の資質など専ら他へ求めているもの：Ne
P	64.6%	31	
NP	8.3%	4	
Nd	6.3%	3	
Nc	6.3%	3	
Ne	4.2%	2	
	計	48	

平成15年度開講科目			
科目数21(専任)			
延べ課題項目数	58		
平均項目数	2.8/科目		
評定*	割合	カウント	次年度における自己課題の取り組み
F	3.4%	2	[評定] 解決：F、進展あり：P、進展無し：NP、記載なし：Nd、教員の交代：Nc、解決をカリや学生の資質など専ら他へ求めているもの：Ne
P	60.3%	35	
NP	24.1%	14	
Nd	8.6%	5	
Nc	0.0%	0	
Ne	3.4%	2	
	計	58	

広報・編集委員会

委員長 渡邊亮一

広報・編集委員会は、平成16年度まで設置されていた紀要年報編集委員会を改称して設置された委員会である。広報・編集委員会に改称した理由は、紀要年報編集委員会の所管事項であった自治医科大学看護学部紀要、および自治医科大学看護学部年報の編集・発行に加え、広報誌「Vitamin N」の編集・発行、看護学部のホームページの編集を所管することになったためである。

平成17年度の広報・編集委員会は、前年度の紀要年報編集委員会の委員5名(渡邊教授、竹田津教授、成田教授、春山助教授、水野助教授)に、新たに基礎看護学の真砂講師を加えた6名の委員、これに看護総務課の松本則子主事を加えた7名で構成し(表1参照)、計2回の委員会を開催した。

表1 広報・編集委員会

委員長	渡邊 亮一教授
委員	竹田津 文俊教授
〃	成田 伸 教授
〃	春山 早苗助教授
〃	水野 照美助教授
〃	真砂 涼子講師
事務局	松本 則子主事

第1回(平成17年5月24日)の委員会では、まず委員会の名称変更、所管事項の確認を行った。次いで、年報第3号および紀要第4巻の編集作業予定を決定した。また、年報第3号の内容を検討し、委員会等報告に国家試験対策委員会、カリキュラム検討委員会の報告を追加することを決定した。また、特別報告としては3件の候補を選定し、委員長が執筆候補者に打診することを決定した。なお、編集方針は前年度の編集方針を踏襲すること

とし、また執筆要領は前年度の執筆要領をそのまま使用することを決定した。紀要第4巻の編集方針・投稿規程も、前年度のものをそのまま使用することを決定した。広報誌「Vitamin N」およびホームページの編集については、それぞれ小委員会を設置して検討することとし、それぞれの小委員会の委員を表2、表3のとおり決定した。

表2 Vitamin N編集小委員会

委員長	春山早苗助教授
委員	里光やよい講師
〃	林 美鳥助手
〃	加藤由香里助手
〃	松本 則子主事

表3 ホームページ編集小委員会

委員長	水野照美助教授
委員	真砂 涼子講師
〃	川上 勝 助手
〃	舟迫 香 助手
〃	岡本美香子助手
〃	松本 則子主事
〃	松本恵美子主事

第2回（平成18年3月30日）の委員会では、平成18年4月1日より自治医科大学の英文名称が「Jichi Medical School」から「Jichi Medical University」に変更されることにともない、年報および紀要の英文名称のなかの「Jichi Medical School」を「Jichi Medical University」に変更することを決定した。また、年報および紀要の編集方針のなかの「2. 刊行」のなかに、それぞれ「12月」と「3月」を追加挿入することを決定した。さらに、紀要の投稿資格のなかの「ならびに自治医科大学看護短期大学」を削除することを決定した。

上述の委員会の審議を経て、「自治医科大学看護学部年報」第3号は、平成18年3月30日に発行した。年報第3号の体裁は、A4判2段組で、総ページ数は58ページであった。また、内容は、2編の特別報告、委員会等報告、教育研究分野別報告、研究業績録、資料であった。なお、発行した年報第3号は、学内の教職員に配布するとともに、国立国会図書館をはじめ、全国の看護系大学、看護系短期大学などに送付した。

「自治医科大学看護学部紀要」第4巻は、平成18年3月31日までには1編しか投稿がなく、年度内に発行することはできなかった。

広報誌「Vitamin N」は、平成17年10月に第2号を発行し、在学生、在学生の保護者、学内の教職員に配布するとともに、非常勤講師、学外の実習

施設などに送付した。

看護学部のホームページについては、「学部案内」、「教育・研究について」、「受験生の方へ」、「卒業生の方へ」、「広報誌 Vitamin N」、「新着トピックス」などのメニューで構成されるホームページを作成し、平成18年4月18日に公開した。

予算委員会

委員長 野口美和子

所管事項は学部の教育・研究にかかる予算に関する事で、教授会構成員は4名（学部長、常置委員会委員長）である。

第1回（平成17年4月21日）

(1) 平成17年度看護学部教育研究経費等の予算について、次のとおり説明がなされた。

1) 看護総務課所掌予算について

①個人研究費及び研究旅費は、前年同額で教員の定数枠の予算となっている。

共同研究費は、前年同額である。

②海外出張旅費は、前年同額である。

③消耗品費については、デスクセット分（1,500千円）を含め1,600千円でナースシューズについては、新規採用教員分である。

④旅費交通費は、新たに看護教育学ワークショップ参加旅費を含め160千円で要望したところ前年同額であった。

⑤印刷製本費は、要望とおり1,045千円であった。

⑥役務費は、要望とおり336千円であった。

⑦賃借料、支払手数料及び雑費は、前年同額である。

支払手数料、雑費については、実績がないため今年度は教育研修・研究セミナー実施にむけて検討して頂きたい旨の説明があった。

⑧賃借料は、前年度実績による予算額になっている。

⑨医学部では研究用機器備品修理費について、講座負担を軽減するため修理費の50%の額を大学が負担している。（備品登録済の研究用機器備品）

看護学部においても、17年度新規要求したところ500千円であった。

運用については、今後検討する旨の説明が

あった。

⑩経常事務の負担金については、前年度実績による予算額になっている。

2) 看護系領域毎共同研究費予算配分及び執行額について

①昨年度3月に研究室の移動を行い、その移動に伴う経費が約601千円（見積額）であったため、その分を共同研究費から差し引いて配分をすることになった。

総額の配当については、各領域で検討することとなった。

②昨年度の予算委員会において、個人研究費を有効に活用するため、看護系について平成18年度を目途に各領域単位で取りまとめて運用することとした。そのための試行期間として今年度から実施予定であったため、改めて各領域で検討することとした。

3) 看護学務課所掌予算について

①講義実習消耗品費は、13,600千円で予算要求したところ、9,000千円であった。

②講義実習用機器備品費は、11,000千円で予算要求したところ、8,500千円であった。

(2) 教員の海外出張に係る取扱について

1) 「自治医科大学教員の海外出張に関する取扱規程」に基づき申請のあった8件について海外出張旅費支出について審議した結果、「学会発表」を目的とした4件が承認された。

2) 今後海外出張に係る取扱について、予算委員会では次年度からは海外出張に係る本委員会での審議はあくまで海外出張旅費を必要とする申請について審議することとし、「海外旅行許可申請書」に添付する「海外出張に係る旅費」の資料に「自治医科大学教員の海外出張に関する取扱規程」に基づく申請可否か（科研費扱い自費等）を記入のうえ提出してもらうこととした。

第2回（平成18年3月16日）

(1) 教員の研究費配当について

1) 看護系教員の研究費の領域配当については、平成17年4月開催の第1回予算委員会において審議いただき了承され、同年同月開催の教授会へ報告をしたところであるが、今回領域配当方法等の案がまとまったので審議していただいたとの発言があった。

2) 資料に基づき配当方法等について、看護総務

課長から詳細な説明が行われた。

3) 研究費繰越額（兼）執行計画書について、「学部長が認めた場合に限り繰り越すことができる」ことから、学部長の決裁が必要との意見があり、課長決裁から学部長決裁へ変更することとなった。

4) 審議の結果、3)の変更以外の資料1、資料2、の配当方法等について了承された。

国家試験対策委員会

委員長 篠澤侑子

国家試験対策委員会の活動は、保健師・助産師・看護師国家試験受験資格のある学生全員が合格できるような環境整備や適切な学習相談等の支援を目的に毎月第2火曜日18時からを定例委員会の開催日とし、平成17年度は表1のとおり10回開催した。委員構成は表2に示すとおりである。

表1 平成17年度国家試験対策委員会議題

回	年月日	審議事項・報告事項
1	平成17年5月10日	・ガイダンス報告 ・問題集、参考書購入状況 ・3月模擬試験実施後の学生指導状況 ・今後の模擬試験実施時の教員役割 ・今後の学習支援の方向性
2	平成17年6月7日	・学生指導状況報告 ・模擬試験マニュアル作成 ・模擬試験申し込み状況 ・民間の国家試験対策講義についての情報提供
3	平成17年7月5日	・第1回看護師模擬試験結果と今後の課題 ・模擬試験結果と学生指導状況報告 ・保健師国家試験模擬試験受験動向・2006年度版保健師国家試験問題集の購入状況
4	平成17年9月13日	・民間の国家試験対策講義受講状況報告 ・学生希望の保健師国家試験模擬試験受験状況と新たな模擬試験の周知結果について ・第92回保健師、第89回助産師、第95回看護師国家試験の施行周知、受験手続準備について ・第2回看護師国試模擬試験後の学生指導について
5	平成17年10月4日	・4年生対象に国家試験日程について説明 ・3年生対象の国家試験オリエンテーションについて ・国家試験の事務手続きについて ・国家試験模擬テストの実施について ・国家試験受験学習のための中教室及びサロンについての時間延長について（22:00まで）
6	平成17年11月8日	・模擬試験実施状況について ・3年生対象の国家試験オリエンテーションについて

7	平成17年12月6日	・国家試験申請状況 ・第1回保健師国試模擬試験実施状況について ・看護師、保健師国家試験模擬試験結果と指導状況及び学習支援対策について ・3年生国家試験オリエンテーション実施報告 ・平成18年1月の看護師、保健師模擬試験実施について
8	平成18年1月12日	・4年生の国家試験結果の指導状況 ・4年生国家試験受験申し込み状況 ・4年生の国家試験受験に対する学習支援 ・3年生の国家試験対策（委員の連絡網、模擬試験申し込み状況）
9	平成18年2月3日	・4年生の国家試験結果の指導状況 ・国家試験受験対策学習支援 ・受験日について ・3年生の模擬試験について ・第95回看護師国家試験データの提供無料サービスを学生に紹介（希望者）
10	平成18年3月13日	・保健師、看護師、助産師の国家試験受験状況と学生指導について ・国家試験問題の教員などへの配布について ・補講の実施状況について ・平成16・17年度の国家試験対策委員会の活動経過について ・国家試験結果に対する対応

表2 委員の構成

氏 名	役 割	領 域
篠澤 侃子	委員長	地域看護学
中村 美鈴	副委員長	成人看護学
渡邊 亮一	委員	一般基礎
成田 伸	委員	母性看護学
西岡 和代	委員	精神看護学
朝野 春美	委員	小児看護学
里光やよい	委員	基礎看護学

学習支援活動は学生を6グループに分け、それぞれのグループに国家試験対策委員が担当し、学習方法、学習の悩みなどの学習相談を実施した。

また、看護師国家試験模擬試験を4回、保健師国家試験模擬試験3回、助産師国家試験模擬試験1回実施し、模擬成績結果などを踏まえて、学生全員の個別面接を5回実施した。12月からは、各領域の教員に呼びかけ国家試験学習に関する学習相談・指導を全教員で対応した。

また、国家試験受験に向けてのオリエンテーションを3年生に1回、4年生に、2回実施し、学年全体で国家試験受験に取り組む士気を高めた。さらに「疫学・統計」など苦手とする科目の補習を行い90名弱の参加が得られた。

学習環境としては、12月から学生サロン、中教室Ⅰ・Ⅱを平日22時まで、2月の第2週目からは、土、日も開放し整備した。

国家試験の合否結果は、表3のとおりであったので、卒業研究の提出時期や教室開放の時期、学習支援などの検討が必要である。

表3 保健師助産師看護師国家試験合格状況

区 分	受験者数(人)		合格者数(人)	合格者率(%)
自治医科大学看護学部	保健師・新卒	105	86	81.9%
	助産師・新卒	15	15	100%
	看護師・新卒	96	94	97.9%
全 国	保 健 師	7,892	6,465	78.7%
	助 産 師	1,600	1,570	98.1%
	看 護 師	48,914	43,211	88.3%
全 国 大学・新卒	保健師・新卒	7,892	6,466	81.9%
	助産師・新卒	523	510	97.5%
	看護師・新卒	7,209	6,882	95.5%

カリキュラム検討委員会

委員長 水戸美津子

本年度カリキュラム検討委員会は、昨年度の検討結果（①看護学部の教育理念及び教育目標の検討、②現行カリキュラムの問題点の検討）を受けて、新カリキュラム構築に向けて委員会を14回開催した。委員会の中にワーキンググループを作り、学生へのアンケート調査並びに新カリキュラムの構成概念の整理を行った。また、教員全員のコンセンサスを得るために教員懇談会を9月、12月、3月の3回開催した。委員会の審議内容は下表に示した。

表1 カリキュラム検討委員会の審議概要

回	日 時	審議概要
1	平成17年4月28日	・新カリキュラムでの実習の考え方について検討した。 ・発達段階、健康レベル、看護実践の場を考慮した実習科目 ・各実習段階別での実習目的、習得技術
2	平成17年5月26日	・各学年での実習のねらい、実習場所、実習方法等について検討した。 ・新カリキュラムに反映させる基礎資料とするため「学生生活と学習に関するアンケート」の調査内容について検討した。
3	平成17年6月23日	・新カリキュラムに反映させる基礎資料とするため「学生生活と学習に関するアンケート」の調査内容について検討した。 ・個別の講義科目の必要性について検討した。 ・教員懇談会の開催について検討した。
4	平成17年8月18日	・「学生生活と学習に関するアンケート」の集計結果について検討した。 ・講義科目並びに実習科目の配置について検討した。 ・教員懇談会への報告内容について検討した。
5	平成17年9月22日	・教員懇談会での意見について検討した。 ・専門科目の考え方について検討した。

6	平成17年10月26日	・カリキュラム検討の基本的な考え方について ・教育理念及び目標について ・カリキュラムの主要概念について ・カリキュラムの構造について
7	平成17年11月17日	・新カリキュラム構造図について ・新カリキュラム授業科目配置について ・ワーキンググループによる検討方法について
8	平成17年12月14日	・講義、演習、実習科目の単位数と時間数の考え方について ・実習科目(案)について ・看護セミナー(案)について ・上記以外の科目について
9	平成17年12月20日	・実習科目(案)について ・看護セミナー(案)について ・環境・存在領域及システム・表現領域の科目(案)について ・他の科目の資料(案)について
10	平成17年12月27日	・教員懇談会での意見を踏まえた今後の進め方について
11	平成18年1月26日	・ワーキンググループの作業結果について ・今後の進め方について
12	平成18年2月28日	・ワーキンググループ検討結果について
13	平成18年3月9日	・ワーキンググループのまとめについて
14	平成18年3月23日	・新カリキュラムは仮称として「基礎科学領域」「実践基礎看護学領域」「生涯発達看護学領域」で構成する方向で今後名称を含めて検討することとした。

平成17年度は、夏季集中と後学期土曜日3週間の2期開催であった。研修会修了者は、第1期開催分が22名、第2期開催分が38名の合計60名であった。内訳は、附属病院関係が46名、大宮医療センターが1名、上都賀総合病院、小山市民病院、済生会宇都宮病院等の実習病院関係が13名の合計60名であった。旧プログラムからの継続者はごく少数であり、年間を通じて3日間のカリキュラムを修了した受講生がほとんどを占めていた。受講生からは、好評を博し、また受講者の感想からは、看護学部の教育に対する理解が進んだことがわかった。研修会終了後には、看護学部長から修了証書が授与された。

臨床指導者研修会担当は看護学部長直属で組織し、教授1名に講師・助手5名で構成され、受講生募集、受講の管理、研修会の準備・実施・片づけを行ったが、研修会資料準備や当日の作業は、看護系全領域教員の協力を得て行った。3年間の開催を通じてマニュアル等が整備され、研修会開催にかかる教員の負担が軽減された。受講生のより自主的な出席やカリキュラム内容の精選が次年度への課題としてあげられている。

臨床指導者研修会

担当 成田 伸

看護学部では、平成15年度から看護学部の臨床実習先の臨床スタッフ向けの研修会として「臨床指導者研修会」の看護学部単独での開催を開始した。平成15年度・16年度は、1日4時限5日間での開催であったが、その開催負担等の問題から、平成17年度からは、3日間の開催とし、科目を内容的に統合し、「看護学部の教育理念」「看護学部のカリキュラムの概要」「看護学部における臨地実習の概要とその指導」「看護教育学」「臨床実習における人間関係論」「看護論・看護過程」とした。前身である看護短期大学の臨床指導者研修会は、主に臨床での実習指導を担当するための教育という目的だった。一方、本学部の研修会が目指しているのは、本学部の教育理念やカリキュラム、実習の位置づけを理解し、教員が行う臨床実習指導に協力し、サポートしてくれる臨床スタッフの育成であった。研修会カリキュラムの内容がより本学部の目指す研修会の目的に近づいてきたといえる。講師は例年同様に、主に学部長と看護系教授が分担した。

教育研究分野別報告

一般基礎

教授 高村寿子

(1) スタッフの紹介

教授 高村寿子

教授 渡邊亮一

助教授 大塚公一郎 (2005年10月1日就任)

学歴：1987年東北大学医学部卒業，1993年自治医科大学大学院医学研究科卒業（医学博士）。職歴：1987年自治医科大学医学部附属病院精神科ジュニアレジデント，1993年同附属病院精神科病院助手，1993年～1995年ハイデルベルク大学医学部精神科留学，1999年小山富士見台病院，2000年自治医科大学精神医学教室学内講師，2001年5月～2005年3月同附属病院精神科病棟医長。所属学会：日本精神病理・精神療学会，日本社会精神医学会，多文化間精神医学会など。

(2) 教育の概要

1) 教育と人間

高村は，2学年前学期の選択科目「教育と人間」（30時間1単位）を担当した。科目分担者は青柳宏非常勤講師（宇都宮大学助教授）で，18時間を担当した。青柳講師はケアの視点からの教育について，高村は教育の対象者別方法論について教授した。

2) 人間関係論

高村は，2学年前学期の選択科目「人間関係論」（30時間1単位）を担当した。科目分担者は大島知佐子非常勤講師で，18時間を担当した。前年度の授業評価に基づき，分担者と教育目的・目標の確認および再調整を図り，大島講師は個としての人間関係のとり方をマイクロカウンセリングで，高村は集団における人間関係のとり方を習得させるため，相互作用を強化する構成的グループエンカウンターを活用した。

3) 健康論

高村は，2学年前学期の選択科目「健康論」（30時間1単位）を担当した。科目分担者は篠史美非常勤講師（山田リズム体操クラブ）で，10時間を担当した。篠講師は，楽しく身体を動かすダンスムーブメントを中心に，高村は青年期の日常生活における健康管理の重要性と具体的な方法について教授した。

4) ジェンダー論

高村は，3学年後学期の選択科目「ジェンダー論」（30時間1単位）を担当した。科目分担者は原ひろ子非常勤講師（お茶の水女子大学名誉教授，現城西国大学客員教授）で，16時間を担当した。原講師は，ジェンダーの視点の理解のために，ジェンダー統計，ジェンダーと健康・医療，ジェンダーと看護・介護等に焦点をあて，高村はセクシュアリティとジェンダーについて，基本的人権の視点から教授した。

5) 健康教育論

高村は，4学年前学期の必修科目「健康教育論」（30時間1単位）を担当した。伝統的な健康教育から発想の転換をしてきた，主体的な行動変容を支えるエンパワーメント型健康教育を支える理論とスキルについて教授した。

6) 情報収集と表現法

渡邊は，余語琢磨非常勤講師・野山広非常勤講師とともに，2学年前学期に「情報収集と表現法」の講義ならびに演習を行った。「情報収集と表現法」は，30時間の選択科目で，効果的な情報収集・思考・表現を行うための基礎的な方法を学習することを目的としている。余語講師は「情報という概念」，「コミュニケーションと言語」，「言語情報の収集と問題発見の技術」，「論理的な分析と思考の方法」について，野山講師は「言語・非言語コミュニケーションの実際」，「論理的・演劇的知による対話と論議の実践」について，渡邊は「プレゼンテーションを助ける技術」について講義および演習を行った。なお，最終回には，学生に実際に課題を与えてグループごとにプレゼンテーションを行わせた。

7) 保健医療情報学

渡邊は，1学年後学期に「保健医療情報学」の講義ならびに演習を行った。「保健医療情報学」は，30時間の選択科目で，看護における情報学の必要性を理解し，基礎的な情報処理能力を養うことを目的としている。「情報とは何か」，「看護と情報処理」，「コンピュータとは」，「コンピュータのハードウェアとソフトウェア」などについて講義した後，Wordによる文書作成の演習，Excelによる表やグラフの作成の演習を行った。

8) 保健医療情報学演習

渡邊は，2学年前学期に「保健医療情報学演習」の講義ならびに演習を行った。「保健医療情

報学演習」は、60時間の必修科目で、統計的な知識を身につけ、それを実際の医療や看護の場面で応用できる能力を養うことを目的としている。「尺度と度数分布」、「代表値と散布度」、「相関と回帰」、「確率・順列・組み合わせ」、「確率分布」、「仮説検定」、「分散分析法」、「推定」などの統計学および「保健統計」について講義し、統計解析パッケージ「Halwin」を使って実際のデータを解析する演習を行った。

9) 心理学入門

大塚は、1学年の学生を対象に、12時間の心理学入門の講義を行った。内容は、知覚、感情、言語など心理学の基本的テーマについての理解を促すものであった。

10) 現代保健・看護セミナー

高村、渡邊は、それぞれ大原良子講師、水野照美助教授と組んで、30時間の「現代保健・看護セミナー」を担当した。「保健・看護セミナー」は、1学年前学期の選択科目で、身近な生活や体験のなかから、保健および看護につながる問題を見出し、現代の保健および看護が直面する課題に関連づける方法を学習することが目的である。

11) その他

高村は、非常勤講師として、国際医療福祉大学保健学部看護学科の「健康教育学」の講義を28時間、埼玉県立大学短期大学部助産学専攻科の「健康教育学」の講義を30時間担当した。

渡邊は、非常勤講師として、女子栄養大学栄養学部保健栄養学科の「情報科学概論」の講義を28時間、社団法人南埼玉郡市医師会久喜看護専門学校の「看護学概論Ⅲ（看護研究）」の講義および演習を28時間担当した。

大塚は、本学医学部3年生を対象に、4時間の精神医学の講義を行った。また、非常勤講師として、栃木県立衛生福祉大学校看護学科専科および御茶ノ水大学生活科学部でいずれも6時間の精神医学の講義を行った。

(3) 研究の概要

1) ピアカウンセリング・ピアエデュケーション研究

高村は、平成14年度から3年間継続した厚生労働科学研究（子ども家庭総合研究事業）を踏まえて、日本ピアカウンセリング・ピアエデュケーション研究会を立ち上げ、各県のピアカウンセリング事

業の立ち上げと事業の評価研究に取り組んだ。

2) 医療者のエンパワーメントとメンタルヘルスケアに関する研究

高村は、文部科学省基盤研究(B)「医療者のエンパワーメントとメンタルヘルスケアに関する研究—新卒看護職者の自己効力感を高めるプログラムの開発—」に、宮崎大学医学部看護学科の前田ひとみ主任研究官の下、研究分担者として取り組んだ。

3) 保健・医療・福祉の連携推進システム構築の方法論と評価手法の開発に関する研究

渡邊は、日本病院管理学会から研究費の助成を受けて（研究代表者 信川益明助教授（杏林大学医学部総合医療学））、他施設の18名の研究者らと「保健・医療・福祉の連携推進システム構築の方法論と評価手法の開発に関する研究」を行った。

4) 統合失調症の精神病理学的研究

大塚は、本学医学部精神医学教室加藤教授とともに、統合失調症における虚偽主題についての精神病理学的研究を行い、その成果をわが国の代表的な精神医学学会誌に論文として投稿し、受理された。

5) 腎透析患者の精神障害についての研究

大塚は、本学附属病院精神科医師らとともに、透析患者における妄想性障害についての精神病理学的研究を行い、その結果の一部を国内の学会で発表した。

6) 日系ブラジル人の社会精神医学的研究

大塚は、本学医学部大学院生近藤らとともに、自治医科大学附属病院精神科において、日系ブラジル人を中心とした外国人患者の診療にあたり、彼らを対象とした社会精神医学的調査、精神病理学的研究を行い、その結果の一部を国際学会で発表した。

(4) その他

1) 高村は、日本家族計画協会や財団法人地域振興財団などで、思春期や健康教育に関するセミナーの講師を務めた。

2) 高村は、各県や各県の看護協会において、思春期ピアカウンセリング事業やセルフエフィカシー介入による新健康教育プログラムに関する講演を行った。

3) 高村は、日本思春期学会理事および研修・編集委員、日本更年期学会評議員、日本健康教育学

会評議員として学会運営に従事した。

4) 高村は、第24回日本思春期学会総会学術集会で、市民公開講座のシンポジストおよび座長を務めた。

5) 高村は、全国性教育研究連絡協議会の理事、関東甲信越静性教育研究連絡協議会の理事として会の推進に従事した。

6) 高村は、日本ピアカウンセリング・ピアエデュケーション研究会の代表、とちぎ思春期研究会の会長として会の統括にあたった。

7) 高村は、平成17年度健やか親子21全国大会で、日本家族計画協会会長賞として表彰された。

8) 渡邊は、平成16年度に引き続いて、財団法人日本医療機能評価機構の一般病院B部会員ならびに評価調査者として、第三者病院機能評価事業に参画した。

9) 渡邊は、日本医療福祉設備学会理事ならびに事業委員会委員、日本医療情報学会評議員、日本診療録管理学会評議員、日本病院管理学会評議員などを務めた。

10) 渡邊は、第24回医療情報学連合大会(第5回日本医療情報学会学術大会)のプログラム委員会委員および一般口演の座長、第34回日本医療福祉設備学会の教育講演の司会を務めた。

専門基礎

教授 竹田俊明

(1) スタッフの紹介

教授 竹田俊明

教授 竹田津文俊

(2) 教育の概要

専門基礎分野は、看護の対象である人間の理解および看護実践の基礎となり看護学学習の基盤となる科目から構成されている。

1) 竹田は1学年に対して人体の構造と機能Ⅰ、人体の構造と機能Ⅱの授業を担当した。これらは本学カリキュラムで人間の理解のうちの身体システムに位置づけられ、看護婦教育指定規則の中での「人体の構造と機能」に関する内容を教授している。科目の目標は人体の構造、解剖学的構成を学習するとともに、正常な身体機能を営む諸原理

を理解することであり、人体機能に関する諸概念を修得することである。人体の構造と機能Ⅰ(前期)は90時間で、循環、呼吸、血液、消化、腎・尿排泄、体液浸透圧と体液pHの調節、内分泌、生殖の機能、ホメオスタシスをカバーし、人体の構造と機能Ⅱ(後期)では45時間で神経、感覚、筋骨格・運動系をカバーした。個別の機能概念を積み上げていくばかりでなく、統合的理解、応用ができることを目指した。解剖学オリエンテッドな内容についてはオムニバス形式をとり、自治医科大学医学部解剖学講座の大河原重雄教授、竹内公一講師が計24時間(人体の構造と機能Ⅰ)及び10時間(人体の構造と機能Ⅱ)教授した。

講義形式を主体としたが、一部実習、演習を取り入れた。血液、呼吸、体液、神経・筋の興奮性に関して実験を含む体験学習を、また人体解剖実習として見学による学習を実施した。

2) 竹田津は疾病と病態Ⅰを担当した。疾病と病態Ⅰの目標は「看護に必要な疾病の発症機序とその治療法の理解」である。実地臨床に即した内容を核とし、看護場面において遭遇する種々の患者の病態理解を第一の目的として講義を行った。

2005年度後期、2005年度入学の1年生に対し、まず症状・症候論を中心に、身体観察、検査、診断にいたる過程を総論的に理解する臨床医療総論ともいべき講義を実施した。次に、疾病と病態の各論にあたる部分では、血液系、循環器系、内分泌系、免疫系、代謝系、消化器系、呼吸器系、腎泌尿器系、脳神経系および電解質の異常の病態生理と治療を中心に講義をおこなった。

講義時間の総計は、各系2~4時間ずつで合計68時間となった。

2005年度前期、2004年度入学の2年生に対し、医療機器論1単位15時間の授業(選択、選択者63名)を行った。看護の場で用いられる医療機器の構造と操作の基本を理解することを目的とした。本学部から竹田津、竹田が、医学部から松浦克彦講師、RIセンター菊地透氏、附属病院から臨床工学部高橋俊郎技士長(鈴木孝雄技士)が分担した。

2003年度入学の3年生に対し、後期に英語Ⅱの講義を15時間行った。医療で良く用いられる用語のしくみを理解するためラテン語、ギリシャ語由来の接頭辞、語幹、接尾辞を考慮した語源学を教授した。さらに英語および、フランス語による医療場面での会話、医学論文の読み方についても取

り上げた。

3) 1学年(編入学生含む)に対する現代保健・看護セミナー(30時間)ではそれぞれ9名の学生を担当し指導した。学生の自主性、自発性を重んじるなかで、学生自身の保健・看護問題への気づき、調査、学習、討議、体験など様々な活動をスムーズに進められるよう助言、支援した。

4) 専門基礎諸科目

この分野の科目及び関連の深い科目として、物理学、化学、生物学、生化学、薬理学、疾病と病理(1学年科目、前期・後期の別は省略)、運動生理学、疾病と病態Ⅱ、栄養学、免疫学、微生物と感染(2学年科目、前期・後期の別は省略)、医療論(3学年科目)が開講された。これらの科目については、医学部教員(兼担)や附属病院のスタッフ、学外からの非常勤講師の方々が科目責任教員としての役割を果たされた。

物理学は宇都宮大学工学部電気電子工学科三石孟助教授、化学は石倉久之自治医科大学名誉教授、生物学は長野敬自治医科大学名誉教授、生化学は医学部生化学講座の濱本敏郎教授、薬理学は医学情報学の岸浩一郎助教授、疾病と病理は附属病院病理診断部の川井俊郎助教授が担当され、運動生理学は医学部総合教育の板井助教授、疾病と病態(Ⅱ)は医学部外科学の永井教授、栄養学は附属病院栄養室の宮本室長、免疫学および微生物と感染は医学部感染・免疫学講座細菌学部門の平井教授が中心となって担当された。医療論は自治医科大学名誉教授の狩野庄悟氏が担当された。科目によっては授業の一部を医学部の該当講座所属教員が分担教授した。

体験学習の取入れとして、生化学では血清タンパク(アルブミン、グロブリン)に関する学生実験、微生物と感染および免疫学では細菌学的、血清学的および免疫学的内容の学生実験、薬理学では薬剤データベースを用いた演習が実施された。

5) 茨城県結城看護専門学校において非常勤講師として解剖生理学の講義を45時間担当した。(竹田)

(3) 研究の概要

1) 竹田はニューラルネットワークの作用と応用についての研究を行っている。

研究ツールとして、NeuralWorks Professional II/PLUS, NeuralWorks Predict, SOM analyzerを

整備した。

2) 竹田津は「医療事故におけるインシデントやミスの意義」と「末期疾患患者における延命措置意志決定」の研究を行っている。

(4) その他

1) 竹田は日本生理学会の評議員及び茨城県看護教育財団結城看護専門学校の評議員を勤めている。

基礎看護学

教授 松田たみ子

(1) スタッフの紹介

教授 松田たみ子(2006年3月31日退職)

講師 里光やよい

講師 大久保祐子

講師 真砂涼子(2005年4月1日就任)

資格：修士(看護学)(東京医科歯科大学大学院医学系研究科博士前期課程)、博士(学術)(千葉大学大学院自然科学研究科博士後期課程)。職歴：葛飾保健所小菅保健相談所・保健師、三楽病院・病棟非常勤看護師および両国健康センター非常勤看護師・保健師として勤務。東京医科歯科大学医学部保健衛生学科基礎看護学助手、東京都立保健科学大学在宅看護学助手及び講師、基礎看護学講師を経て着任。

助手 亀田真美(2006年3月31日退職)

助手 角田こずえ

助手 川上 勝

(2) 教育の概要

1) 看護学原論

看護学原論は、1年次前学期、3単位45時間の必修科目である。学習目的は、看護を理解するための共通基盤である看護の概念・目的について、歴史的背景を踏まえて理解し、看護実践の基盤となる人間観・生活感・健康観を養うとともに、看護をとりまく諸事情に関する現実的課題を見据えて将来を展望する能力を養うことである。松田が37時間の講義を担当し、保健医療福祉チームの理解については、病院内の7部門の協力をいただき、8時間分を講義と見学とした。

2) 基礎看護学Ⅰ

基礎看護学Ⅰは、1年次前学期、2単位60時間の

必修科目である。学習目的は、看護実践の理論的根拠と問題解決過程を理解し、あらゆる看護実践の共通基盤となる看護技術を学習することである。看護学原論と平行して開講され、両科目とも看護学の理解、看護実践（技術）の理解の基礎となる科目であることから、両科目の講義内容が相互に関連して学生の理解に効果的であるように計画して行った。

3) 基礎看護学Ⅱ

基礎看護学Ⅱは、1年次後学期、2単位60時間の必修科目である。学習目的は、日常生活行動に関連する援助としての看護実践に必要な理論と基本的看護技術について学習することである。環境、ボディメカニクス、清潔、食、排泄（自然排泄への援助）などについて、講義と演習を行った。また、看護を実践の思考過程も看護技術の学習の中にも意識づけることをねらって、基礎看護学のまとめとして、事例を用いて看護計画を立て実施・評価するという内容を取り入れた。

4) 基礎看護学Ⅲ

基礎看護学Ⅲは、2年次前学期、2単位60時間の必修科目である。学習目的は、診断治療に関連した生活の援助としての看護実践に必要な理論と技術について学習することである。感染予防、検査・薬物療法に伴う看護、排泄（導尿・浣腸の技術）、罨法・吸引・吸入、死および事例を活用した看護過程の理解などについて、講義・演習で行った。この科目では、看護基礎技術の科目のまとめとして、看護技術の自発的学習の喚起と、個別の修得状況の確認のために、個別に技術チェックを行った。

看護過程の理解については、昨年度まで基礎看護学Ⅲで基礎看護学の最終的なまとめそして基礎看護学実習Ⅱに継続する学習の位置づけで、個別の看護の理解を目的として行っていたが、17年度は、生活援助技術学習のまとめとして個別の対象の状況を踏まえ看護技術が実践されるということの意識化の視点から基礎看護学Ⅱで第一段階を行い、基礎看護Ⅲで基礎看護学Ⅱから発展させた段階の内容で、個別の対象全体を捉えた看護の展開を理解することを目的として行った。

5) ヘルスアセスメント

ヘルスアセスメントは、2年次前学期、1単位30時間の選択科目である。対象の身体全体と精神・情緒の健康状態を把握する方法を理解することを

目的としている。17年度は105名が受講した。

科目担当者は竹田津・永井・松田であり、救急時におけるアセスメントに関しては自治医科大学外科学の安田是和教授にお願いした。また受講学生数が多かったため、技術演習は基礎看護学の教員の応援を得て行った。

6) 基礎看護学実習Ⅰ

基礎看護学実習Ⅰは、1学年で履修する実習である。11月6日から10日の1週間、1単位45時間の実習を行った。実習の目的は、「対象により看護を提供するために、医療におけるコミュニケーションの機能を学ぶ」である。自治医科大学附属病院の成人系16病棟において、各病棟1名の担当教員配置で実施した。学生は入院生活に係る各部門の見学後、病棟において看護師のとり多様なコミュニケーションの場面に参加し学習した。また、受け持ち患者とのコミュニケーションを通して、看護者としてのコミュニケーションの難しさを体験しながらも、受け持ち患者の入院生活の状態、入院中の思いを理解することができた。

昨年度より16病棟で実習を行っているが、少しでも少人数のグループ編成が取れることは、初期の実習に特に重要な個々への丁寧な指導が可能となり教育上有効であると思われる。

7) 基礎看護学実習Ⅱ

基礎看護学実習Ⅱは2学年後期に、受け持ち患者の看護の実施を通して学ぶ実習である。10月16日から27日までの2週間、2単位90時間の実習を行った。実習の目的は生活援助技術の実践を学ぶことにあり、「これまで学習した知識を通して、健康障害による日常生活の変化から生じる対象のニーズを理解し、看護を実践するための基礎を学ぶ」とした。自治医科大学附属病院の成人系16病棟において各病棟1名の担当教員配置で実施した。

学生は、実際に患者の看護を行うことの難しさを感じつつも、個別の看護の実施の仕方を学ぶとともに、保健医療チームにおける自らの立場を自覚し、看護職の役割や患者への働きかけの意義について体験を通して学びを深めた。

8) 看護学概論

看護学概論は、1年次前学期、1単位15時間の必修科目である。学習目的は、人々の健康における看護の働きについての概要を理解し、看護学を学ぶための基盤を養うことである。科目責任者を松田が担当し、今年度から評価を試験としたことか

ら、7領域各々の講義時間を1コマ2時間として行うこととなり、基礎看護学領域の講義を松田が、精神看護学領域の講義を永井教授が、地域看護学領域の講義を篠澤教授が、母性看護学領域の講義を成田教授が、小児看護学領域の講義を川口教授が、成人看護学領域の講義を中村教授が、老年看護学領域の講義を水戸教授がそれぞれ担当した。

9) 現代保健・看護セミナー

現代保健・看護セミナーは、1年次前学期、1単位30時間の選択科目である。学習目的、身近な生活や体験の中から、保健および看護につながる問題を見いだす方法を学習することである。松田は亀山講師（老年看護学）と10人の学生を担当した。里光は春山助教授（地域看護学）と9人の学生を担当した。大久保は川口教授（小児看護学）と10人の学生を担当した。真砂は篠澤教授（地域看護学）と9人の学生を担当した。学生個々の興味分野についての発表と質疑、身近な生活体験から感じたことをテーマとし、学外の体験学習なども通して探求を深めた。担当教員は、各時間の内容が充実するよう準備をし、討議や体験が実りあるものになるようサポートした。

10) 保健・看護研究セミナー

3年次後学期、1単位30時間の選択科目であり、保健・看護に関する研究のテーマの選び方、研究の進め方について学ぶことを目的としている。看護系の全教員が担当であり、基礎看護学では22名の学生を担当した。研究の基本的な講義で導入した後、各学生が関心をもっているテーマの論文を読み、プレゼンテーションと全体討議を主な方法とした。個々の学生の4年次の卒業研究で取り組む準備としての基礎の内容の学習となるよう努めた。

11) 卒業研究

4年次後学期、4単位120時間の必修科目である。3年次の保健・看護研究セミナーの学習を活用し、学生の個別の研究課題への取り組みをとして研究のプロセスの理解および論理的思考を深めることが目的である。看護系の教員全員が担当であり、基礎看護学では21名の学生を担当した。文献研究3件、実験研究9件、調査研究9件の学生個別のテーマの研究を指導した。

12) 臨地実習指導（基礎看護学実習は前掲）

川上は、7W（脳神経センター神経内科）病棟で老年看護学実習として3グループを担当した。

亀田は7A（整形外科）病棟、角田は5B（消化器・一般外科）病棟、川上は7W（脳神経センター神経内科）病棟で成人看護学実習Iを担当した。

また、フィールド実習（在宅フィールド）で、大久保、真砂、亀田、川上は訪問看護ステーション実習を担当した。

(3) 研究の概要

1) 看護学共同研究費を活用して、平成16年度より、根拠に基づく看護の働きかけ、良い効果を生む看護技術の開発を目指して、「看護技術の生体情報に基づく方法的根拠と生体への影響の解明に関する研究」についての取り組み、基礎看護学全員で研究を行った。16年度の成果を自治医科大学シンポジウムのポスターセッションで発表した。

2) 里光は、看護技術演習に模擬患者を用いた場合の効果について明らかにするためにいくつかの実験を行い、一部を学会発表した。また、看護師のキャリアアップに影響するものを明らかにするために、中堅看護師からインタビューを行い、成果の一部を学会発表した。

3) 真砂は、平成17年度科学研究費補助金（若手研究（B））による研究課題「香りを付加した足浴の睡眠導入効果に関する研究」に取り組み、効果検証のための実験およびデータ分析を行った。

4) 川上は、平成17年度科学研究費補助金（若手研究（B））による研究課題「寝床振動センサーを用いた睡眠モニタリング法の開発－転落防止策の確立を目指して－」に取り組んだ。

(4) その他

1) 松田：①平成17年8月4・5日に宇都宮市文化会館で開催された第36回看護学会（看護教育）の準備委員長を、前年度より継続してつとめた。②平成17年度栃木県看護協会臨床指導者講習会において、臨床実習の評価（3時間）の講義を担当した。③日本ルーラルナース学会国際研究集会において、分科会「へきちにおけるネットワーク作りと研究」のファシリテーターをつとめた。

2) 里光：①平成17年度栃木県看護協会臨床指導者講習会において、実習指導の原理（6時間）の講義を担当した。②看護記録セミナー（学研ナースングセミナー（大阪2005年5月8-9日、仙台2005年7月16-17日、東京2005年9月24-25日開催）、責任者古橋洋子）において演習講師を担当した。

3) 大久保: ①平成17年度栃木県看護協会臨床指導者講習会において、実習指導の評価(6時間)の講義を担当した。②日本褥瘡学会関東甲信越地方会栃木県支部の支部長として、講演会の開催などを行った。③栃木県看護協会広報出版委員として活動した。

4) 真砂: ①平成17年度栃木県看護協会臨床指導者講習会において看護論(6時間)の講義を担当した。②平成17年度栃木県看護協会主催の研修において、「看護研究: 基礎編・応用編」の講義および面接指導を担当した。③11月に第11回栃木看護学会学術集会の一般口演にて座長をつとめた。

地域看護学

教授 篠澤侃子

(1) スタッフの紹介

教授 篠澤侃子

助教授 春山早苗

講師 岸恵美子

助手 鈴木久美子

助手 佐藤幸子(産前・産後休暇・育児休業
平成17年5月27日～18年3月31日)

助手 舟迫 香

(2) 教育の概要

1) 「地域看護学概論」は、2年次後学期、2単位30時間の必須科目でオムニバス形式により講義を実施した。篠澤が10時間で地域看護の歴史、公衆衛生看護活動の展開として、学校看護、産業看護、施策化と看護師の役割を、春山が12時間で地域看護学の概、公衆衛生看護活動の展開として地区活動の考え方、手段、ケアシステムなどを、岸が6時間で在宅看護活動の展開とケアシステムを担当した。うち春山の講義2時間を演習とし、学生を9グループに分けセミナー形式で地域看護学領域の教員全員により実施した。演習内容は、家庭訪問事例を用いて学生7～8人のグループに教員1人が担当した。家庭訪問事例は、疾病、生活、生きがい、家族の健康管理まで含んだケースへの支援から保健師の役割など学生個々に理解した点を発表させながら学ばせることが出来た。講義全体をパワーポイントに作成、ビデオ、資料配布などの媒体を活用し地域看護学概論を教授した。

2) 「地域看護活動論Ⅰ」は、3年次後学期、2単位30時間の必須科目である。全体を①地区活動、②在宅看護過程の展開、③保健指導論の3つに分け、講義に演習を加えて実施した。①学生は講義を基に某自治体の地区既存資料から必要な情報を追加しグループワークにより地区活動計画を作成させた。②在宅看護の典型的な模擬事例を基にこの事例の看護過程の展開について所定の記録用紙に記述させた。①②はグループで学習をすすめ、講義、演習を組み合わせ、教員の助言を得ることで、さらに学習を深めさせた。②の模擬事例から③慢性疾患患者への保健指導計画を各学生が立案し、立案した計画にあわせて、患者役、保健師役、観察者役の3人一組でロールプレイを行った。保健師役として実施後に、患者役、観察者役からの助言をもらうことで、自己の保健指導を振り返らせた。

3) 「地域看護活動論Ⅱ」は、3年次後学期、2単位30時間の必須科目である。地域で生活する各発達段階にある対象や健康障害をもつ対象への地域看護活動別に5つの学習課題別に2～4回の講義をオムニバスで行った。具体的には母子保健福祉活動が篠澤、成人・高齢者保健福祉活動が岸、感染症対策と保健活動、難病対策と保健福祉活動、地域精神保健福祉活動を春山が行った。

4) 「地域看護活動論Ⅲ」は、4年次前学期、1単位14時間の必須科目である。産業保健、学校保健、地域における看護管理として、行政における看護管理、健康危機管理から構成し、産業看護は外部講師1名、学校保健は外部講師1名、行政の場における地域看護管理は篠澤、健康危機管理は春山によるオムニバス形式で行った。教材は、講義内容により、実際に活用しているパンフレットや指導資料、研究として調査した資料、体験事例、最新の情報・制度などを独自資料として学生に配布した。既存の資料や自己の活動場面をビデオ・パワーポイントなどの視聴覚教材を用いてイメージしやすくした。

5) 「地域保健論」は、4年次前学期、2単位30時間の必須科目である。地域看護概論で公衆衛生看護活動とは何かを講義で学び、地域看護活動論Ⅰでは、ペーパーシュミレーションを用いた地区活動の展開方法を講義と照らし合わせ学習した。地域保健論は、住民の健康意識や保健行動を把握し保健師の活動をする上での活動目標、活動計画、

活動の評価を地域の実情を踏まえて考えることを目標に3つの内容にわけ講義、演習計画を篠澤が行い、学生のグループ・個別指導は、篠澤、春山、岸、助手で行った。

1つ目は、実習周辺自治体の20の地域住民組織を対象に健康意識、保健行動を調査実施によるヘルスニーズの把握に基づいた活動の計画を立案した。地域住民に直接関わり、インタビューという演習方法を用い、住民の意見や保健事業利用後の住民の反応から地域のヘルスニーズを明らかにしたり、住民のニーズにあった保健事業を考えさせた。

2つ目は、実習市町の既存資料の把握、市町保健師による保健事業の説明、評価から、学生個々が地域のヘルスニーズを抽出し活動に対する行動目標を立案した。

3つ目は、実習市町の公衆衛生看護活動の実習計画を実践するための行動目標を立案した。地域住民に直接関わり、インタビューという演習方法を用い、住民の意見や保健事業利用後の住民の反応から地域のヘルスニーズを明らかにしたり、住民のニーズにあった保健事業を考えさせた。

6) フィールド実習は、3年次後学期、3単位135時間の必須科目である。科目の目的は、様々な健康レベル及び生活の場（環境を含む）における看護の役割特性と課題について学習する。次の4つの下位目標は、①地域ケアシステムの一環としての在宅看護の役割と機能の理解、②療養者及び家族に必要な基礎的知識・技術・態度を養う、③地域看護学領域看護活動の場として学校保健・産業保健における、看護の役割と機能を理解し健康問題解決の対応についての基礎的知識・技術を養う。④外来診療、救急診療における様々な対象、クリティカルな状況にある対象に看護の対応と役割について理解することとしている。学生107名を自治医科大学周辺地域とへき地域に分け、さらに訪問看護ステーション等における在宅看護活動、学校・産業における看護活動、外来・救急などにおける看護活動を学ばせた。実習施設として、自治医科大学周辺の施設では、訪問看護ステーション13カ所、小・中学校7カ所、事業所3カ所、自治医科大学病院外来施設の計24施設を活用した。へき地の施設では、群馬県の西吾妻福祉病院・六合温泉医療センター外来・福祉施設や日光市民病院・奥日光診療所・福祉施設を中心に在宅看護、学校、

産業、など10施設を活用し合計34施設で実習した。在宅は、2週間、学校、産業では、各1日間の実習、へき地の施設は、連続2週間の実習を行った。学生を2～5名、46グループに分け4週間（各グループ3週間）の実習を地域看護学領域、成人看護学領域、老年看護学領域の教授が企画した。地域看護学領域の教員、篠澤、春山、岸、助手のほか他看護学領域19人の教員により実習指導を行った。

7) 「地域看護学実習」は、4年次前学期、3単位135時間の必須科目である。実習の目的は、公衆衛生看護の実際を通して、地域の人々の生活や健康に関する認識と解決方法を知り、地域保健活動における看護の役割について理解する。目標として、①地域住民の生活や健康問題を解決するための地区活動の展開方法を学ぶ。②地域における援助対象者の健康問題の把握と援助の実際を学ぶ。③保健所、市町村の保健、医療、福祉、環境に関する活動を理解する保健所、市町村の機能、そこに勤務する保健師の役割を理解する。④地域看護活動を実践している看護職との関わりをとおして、看護職としての責任性や姿勢を学ぶ。⑤現在行われている地域看護活動から、地域住民の健康レベルやQuality of Life (QOL)をより向上させるための課題を明らかにすることとしている。学生、106名を1施設2～6名のグループに配置し24施設で実習を行った。市町村は14箇所、うち2施設が9日間を1回、12施設が9日間を2回実施し、保健所は10箇所、うち7施設が4日間を4回、3施設が4日間を2回実施した。地域看護学教員が5名で1人4～5施設受け持ち、市町村実習グループ別に指導した。その地域で深めたい健康生活に関するテーマ学習の進め方やグループ間の調整などの指導や地域の保健事業に参加する行動目標の確認、カンファレンスにおいては、学生の気づきを大切に、学生の学びの共有化や講義との結びつけなどを図った。

8) 「看護学概論（健康と生活を守る看護の役割・機能Ⅱ）」は、必須科目で1単位15時間の内の1回90分を担当した。地域看護学は、地域で生活する様々な健康レベルにある人々で個別から地域住民全体を対象にし、健康や生活の質向上に寄与する看護の実践の科学であることを教授した。また、地域看護の対象や看護活動、ヘルスケアシステムにおける看護の役割などについて、事例やパワーポイント、資料などを用いて授業をすすめ

た。

9)「家族生活援助論」は、4年次前学期、2単位30時間の必須科目である。地域看護学領域では、篠澤が成人を中心にした家族生活の援助方法を2時間、岸が高齢者を中心にした家族生活援助方法を4時間、事例を用いて講義した。

10)「地域の生活と健康」は、1年次前学期、1単位30時間の選択科目である。88名の学生が受講し、篠澤9コマ、春山6コマ、担当した。篠澤は、地域の人々の生活を理解し健康との関連性について学ぶことを目的に学生自身の生活の振り返りや高齢者夫婦の語りから、自己の生活を考えさせた。また、地域の老人クラブ員との交流会を企画し高齢者の生活・健康状況、交友関係、保健行動などの活動状況を聞きレポートにまとめさせ、グループワークや発表を通して学ばせた。春山は、学生が理解しやすいように、また、イメージしやすいように具体的な事象を教材に用いて、自然や社会や文化、などの環境や人々の慣習や地域社会が人々の健康にどのように影響しているかなどを絵、写真、図を用いて教授した。各講義のあとに関連した課題を出し、主体的に考えたり、学習につなげたり出来るようにし、その課題から一つを選び、評価対象となるレポートを提出させ、生まれ育った地域や現在住んでいる地域に目を向け、地域社会生活と健康との関連について考えさせた。

11)「現代保健・看護セミナー」は、1年次前学期、1単位30時間の選択科目である。篠澤は真砂助教授と9名の学生を担当した。学生の興味・関心のあったテーマ「ストレス」について文献探索の発表や、ある1日(24時間)の日課を心の好調、不調と感ずる動きをグラフ化したものをレポートし発表した。また、「ストレス対処方法」として、生活の中での癒し、食事、入浴、睡眠、運動から植物、動物、色、匂い、など様々な角度から調べ発表したり、ストレスを緩和する食事を実際に行い試食したりして、ストレス対処としての癒しの効果を探求し看護に結びつけて考えることができた。

春山、岸ともに9名の学生を担当し、それぞれに現代保健・看護セミナーを実施した。

12)「保健・看護研究セミナー」は、3年次後学期、1単位30時間選択科目である。篠澤、春山、岸が担当した。導入として、このセミナー学習目的・目標などシラバスの説明、看護研究の目的、特徴、

研究問題や課題の発見・決定、倫理的配慮について春山が講義した。次にセミナー形式で、学生が文献検索し購読した看護論文を3教員がグループに分かれて、各学生に発表させディスカッションすることにより研究問題の発見と研究課題に結び付けるよう考えさせた。文献検索の目的・方法やレポート作成について、講義形式で学ばせた後、研究課題に関連する文献を5～10編選ばせ、研究テーマによって、それを探求する方法は異なることなどを理解できるように所定の書式に基づいて記述させた。記述した文献をプレゼンテーションさせ、ディスカッションにより倫理的配慮、看護実践への適用、看護学が追求すべき多様な課題について学ばせ、現時点での学生の研究課題に関連のある看護の論文を読んでまとめさせた。

13)「卒業研究指導」4年次後学期、4単位120時間、必須科目である。目的は、看護研究の方法や進め方から論文の作成までの過程を体験し学ぶ。地域看護学領域の担当学生は合計16名で篠澤・佐藤が4名、春山・舟迫6名、岸・佐藤4名、鈴木・春山2名を指導した。5～6月にかけて学生の動機などから研究可能な課題を絞り込んだ。8月に研究フィールドの決定、8月～10月上旬にかけて調査を実施した。10月は収集したデータの整理、分析、11月調査結果の分析、文献検討、卒業論文の作成し1月に研究発表会を実施した。

学生は自分の関心から発した研究課題であるため、熱心に取り組み、学生16名全員が地域、病院のフィールドを使用して面接調査等を実施し分析しまとめた。

(3) 研究の概要

1) 共同研究

自治医科大学看護学部共同研究費を活用した「看護実践能力向上のためのプログラム」の開発に関する研究―派遣制度によるへき地等地域病院における実践経験のキャリアへの反映―をテーマに、本学部の篠澤、春山、岸、鈴木、佐藤、舟迫と自治医科大学附属病院看護部の葉真寺美佐子氏、工藤祝子氏、小谷妙子氏、佐藤里美氏、野澤京子氏、福田順子氏と協働して共同研究に取り組んだ。

平成17年4月に開催した日本ルーラルナースング学会で発表した研究結果から、自治医科大学附属病院看護部の派遣制度は、看護職員の実践能力

の向上に寄与している。その一方で、課題、目的が不明確、派遣中のフォローやオリエンテーションに改善の必要性があるなど派遣制度の課題が明らかになった。看護部の派遣制度をより良くしていくために、看護スタッフのキャリアアップ支援のための教育研修体制に位置づけていく必要があると考えられる。

そこで、へき地など地域病院への派遣での実践経験により看護実践能力を向上させ、看護職としてのキャリアアップを支援するより良い派遣制度にするために、管理的立場以外のスタッフとして派遣されている看護職を対象とした教育研修プログラムを検討することとした。

a 2005年度末に派遣より附属病院へ帰院した看護職に対する調査の実施

平成17年4月に発表した項目と同じ質問項目により調査し比較検討した。

派遣した看護師20名中回答数11名、うち管理職的立場を除く9名について検討した。

b 本院看護部との派遣制度に関わる課題や派遣者に対する教育プログラムについての検討

平成17年4月に開催した日本ルーラルナースィング学会で発表した課題と同様な傾向を示した。課題として、派遣前のオリエンテーション、派遣期間中の目標管理の必要性が明らかになり教育プログラムについて検討した。

c 次年度の課題

今後の医学部との共同による医療人GPワーキンググループにおける検討

この研究は、「地域医療など社会的ニーズに対応した医療人教育プログラム」で平成17年12月に選定され地域医療を担う医療人育成のための「自治医科大学地域医療後期研修プログラムが文部省の補助事業（医療人GP）として平成18年4月から研修を開始する予定である。

2) 平成16年度科学研究費補助金（基盤研究（C）

（2））による研究課題「へき地における看護活動体制の確立及びへき地診療所看護職の役割拡大に関する研究」（研究代表者：篠澤）に地域看護学領域の教員全員で取り組んでいる。

a 平成17年度も全国のへき地で活動している看護職を対象に、研修会のテーマを「地域の特性に応じた看護活動の発展と看護活動体制について考える」（サブテーマに保健医療福祉の連携と題して）2泊3日の有償による研修会を実施した。

参加者は全国のへき地診療所、へき地支援病院、へき地を管轄する市町村、保健所の看護職11名であった。1日目は、「山間地における包括的ケアの実践と関係職種の連携と課題」について六合温泉医療センター長、西吾妻福祉病院管理者からの講演を行った。講演を踏まえて、さらにへき地における保健医療福祉の連携として「医療機関と行政との連携」を郡上市和良地域振興事務所健康福祉課の保健師長から、「三宅村における診療所看護活動」を三宅村国保直営中央診療所看護師長からの講演を受けて「地域における看護活動と看護職の役割」についてグループディスカッションを行った。病院やへき地診療所看護活動の課題や活動の工夫などの情報交換を行った。2日目は、災害看護に焦点をあて、「中核病院における災害看護活動と保健医療福祉の連携」を西吾妻福祉病院看護部長から、「離島診療所における災害看護活動—三宅島の災害看護活動から—」を三宅村診療所師長から、災害看護活動として「災害応急対策におけるトリアージ」を都立広尾病院看護部災害担当者から講義を受けた。それを踏まえて講師、受講生がグループディスカッションにより①へき地災害についてどのように考えたのか？②自分の所属組織は地域の中でどのように位置づけられ、どのような役割を持っているかを考えたのか？③日頃からのどのような連携や体制づくりをしていけばよいかについてまとめた。3日目にグループディスカッションの結果を発表し全体討議をおこなった。研修会をとおして、へき地看護職間の連携の必要性を理解した。特に災害時の看護活動をスムーズに行うためには常日頃の連携や会議が重要であると認識された。

b T島しょ町村の看護職技術者確保・定着に関する実態調査を行い分析した。

3) 厚生労働省科学研究費補助金による（健康科学総合研究事業）「地域の健康危機管理における保健所保健師の機能・役割に関する実証的研究」の一環として、分担研究者である春山を中心に、地域看護学領域の教員として「へき地の健康危機管理体制づくりにおける保健所保健師の活動の視点と活動方法の検討」という研究テーマに取り組み、へき地の健康危機管理体制づくりにおける保健所保健師の機能・役割と活動方法を明らかにするために、診療所看護師や保健所保健師、災害拠点病院看護師の活動事例や認識を調べた。

4) 平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))による研究課題「へき地における高齢者の健康づくりと介護予防のための地域ケア体制構築に関する研究」(研究代表者:春山)に地域看護学領域の教員全員で取り組んでいる。平成17年度は、へき地診療所を有する2地域において高齢者の健康づくりと介護予防に関するアクションリサーチを実施した。

5) 鈴木は、平成17年度文部科学省科学研究費補助金(若手研究(B))の交付を受け、「へき地における地域ケア体制のあり方に関する研究」を行った。本年度は、離島、過疎地域、山村地域、豪雪地帯といった地域特性の異なる地域において、へき地診療所看護職と市町村保健師の連携の現状および連携の成果について、へき地診療所看護職と市町村保健師に対して半構面面接調査を実施した。

(4) その他

1) 地域看護学領域の教員が中心となり、他の領域の教員とも協力して、小規模離島である東京都利島村、御蔵島村、青ヶ島村における「保健師等技術職定着のための実態調査事業」についての調査を行っている。平成17年度は、保健事業評価項目を作成し、各村の保健事業の現状を評価し、住民のニーズに合った保健事業の展開を検討するために、評価項目に基づき、資料、住民及び保健医療福祉従事者等へのインタビュー、保健事業の参加観察等により、既存の保健事業により充足されている住民のニーズ、各保健サービスの利用しやすさ、利用しにくさを明らかにした。

2) 春山は、日本地域看護学会の教育委員として、大学教員が地域看護学の実習指導において責任をもっていくべき点、保健師分野の専門看護師制度適用の必要性について教育委員会において検討した。

3) 春山は、日本看護系大学協議会の保健師教育検討委員として、基礎教育レベルの保健師教育について、どのような能力を備えた人材を育成するのか、そのためには実習においてどのようなことを学ばせるべきかについて、検討委員会において検討した。

4) へき地診療所看護職の抱えている問題や地域の健康問題をグループディスカッションにより共有化し、地域の特性に応じた問題解決を図るため

の活動の展開や連携における看護者の役割、並びに、資源の少ない地域における高齢者を支援する方法を考えることを目的とした(財)地域社会振興財団主催第2回地域看護活動研修会において篠澤、春山、岸、鈴木、舟迫は、グループワークのファシリテーターを務めた。さらに、篠澤・岸は、「地域における看護活動と看護職の役割」のワークショップ発表の司会・進行を務めた。

5) 春山は、松田教授と共に、医療人GP自治医科大学地域医療後期研修プログラムにおける看護師を対象としたプログラムを担当し、申請書作成に関わった。地域医療への動機づけを高めることや地域に根ざした看護実践能力の修得・向上とそのフィードバックによる附属病院の看護力向上を目的に、人材確保を兼ねたOn the job trainingとしての看護師のための地域医療研修コース プログラムを看護部の協力を得て作成した。

精神看護学

教授 永井優子

(1) スタッフの紹介

教授 永井優子

助教授 西岡和代(2006年3月31日退職)

助手 田中京子(2005年4月1日就任)

資格・学位:保健医療学修士、学歴:放送大学教養学部卒、国際医療福祉大学大学院博士課程後期満期退学。職歴:獨協医科大学附属病院勤務後、栃木県立衛生福祉大学校、栃木県県南高等看護専門学院を経て着任。所属学会:日本ヒューマンケア心理学会、日本看護学教育学会、日本適応看護理論研究学会、日本看護科学学会、日本保健医療行動科学学会、日本精神保健看護学会。

助手 関 澄子(2006年3月31日退職)

(2) 教育の概要

当領域では、あらゆる健康水準のすべての個人及び集団を対象に、対象者の人権を尊重するとともに、その人の希望を踏まえた精神看護実践の基礎的知識と技術の修得を精神看護学の学士レベルの教育目標として教育に当たっている。完成年度である本年は、昨年から引き続き開講している3年次学生までを対象とした授業科目のほか、4年次学生を対象とした「卒業研究」で7名の学生を

指導した。また、永井は2年次学生を対象とした「成人・老年保健論」を臨時に1時限のみ担当した。さらに、看護学研究科における精神看護専門看護師の教育課程を開設するべく、準備を行った。

(3) 研究の概要

当領域では、「精神看護学実習」における教育の効果について検討を続けている。また、平成18年6月に永井を学術集会会長として「日本精神保健看護学会第16回学術集会」を開催することになり、事務局として企画運営に当たっている。

(4) その他

永井および西岡は、栃木県看護協会および日本精神科看護技術協会等が主催する各種研修会の講師として、看護職の継続教育に協力している。なお、永井は看護師国家試験ブラッシュアップ委員、精神保健福祉士国家試験委員をはじめ、日本精神保健看護学会理事、日本生活指導学会常任理事、日本看護教育学会評議員を務めている。

母性看護学

教授 成田 伸

(1) スタッフの紹介

教授 成田 伸

講師 大原良子

助手 岡本美香子

助手 稲荷陽子 (2005年4月1日就任, 2006年3月31日退職)

資格: 助産師, 看護師, 保健師, 修士 (保健学) 学歴: 日本赤十字看護大学卒。東京都立医療技術短期大学専攻科助産学修了。群馬大学大学院医学系研究科看護学分野地域・国際看護学修了。職歴: 武蔵野赤十字病院に助産師として勤務後, 2年間青年海外協力隊 (ウズベキスタン) 隊員として派遣。所属学会: 国際看護研究会, 日本看護科学学会。

助手 加藤由香里 (2005年4月1日就任, 2006年3月31日退職)

資格: 助産師, 看護師, 保健師, 看護学学士。学歴: 国際医療福祉大学保健学部看護学科卒。自治医科大学看護短期大学専攻科助産学専攻修了。職歴: 自治医科大学附属病院総合周産期母子医療

センターに助産師として勤務。

(2) 教育の概要

1) 看護学概論 (1単位: 15時間, 1年次前期開講)

15時間のうち, 2時間 (1コマ) を成田が担当し, 「母性各期における健康問題と看護のはたらきを理解する」を学習課題として, 「妊娠・出産・育児期 (新生児期) を中心に展開される母性看護の働きを学ぶ」ことに視点を置いて講義した。

2) 現代保健・看護セミナー

成田は山本講師と共に, 最初は2本の映画の視聴を行い, その中にあるジェンダーの違いについてディスカッションした。その後学生と話し合った結果, 「癒し・健康」とテーマとして取り上げることになり, 資料を集め, 最終的には足浴, アロマ, 音楽等の「癒し」といわれているケアの効果を実験的に検証する作業を行った。まとめは十分とは行かなかったが, 学生も満足いくセミナーとなった。

大原は高村教授と共に, 個々の学生が興味を持つテーマに取り組み, アカデミックライティングの方法やプレゼンテーションなど大学で必要な学習スキルを培う授業構成とした。学生の中には, 文献学習だけでなくデータ収集などを行う学生もあり, テーマに前向きに取り組んでいた。

3) 保健・看護研究セミナー (1単位: 30時間, 3年生後学期開講)

母性看護学領域での学習を希望する17名の学生を成田, 大原で指導した。まず始めに研究の概要に関する講義を成田が行い, その後は成田と大原が協力して指導した。各自が興味のある論文を探索し, そのテーマの紹介, 集めた文献の批評を全体で行い, 再度文献検索・全体討議を行い, 最終的に各自レポートとしてまとめた。

4) 母性看護学概論 (1単位: 30時間, 1年生後学期開講)

成田が担当し, 母性看護学の概念, 対象の特性を理解し, 保健医療システムの中で果す看護の役割について理解することを目的に, 母性看護学の概念及び機能と役割, 母性の身体的, 心理的, 社会的特性を理解, 母性看護の変遷と諸施策, 母性をめぐる生命倫理の現状と課題を理解, さまざまな立場にある母性と家族のもつ看護の問題を理解について講義した。

5) 母性・小児保健論 (1単位:30時間, 2年生前学期開講)

母性・小児保健にかかわる看護の役割を理解することを目的に, 総論を成田が担当し、その後前半は主に母性と健康生活援助を中心に成田が講義を行い、後半は小児保健を中心に川口が担当した。

6) 母性臨床看護学 (2単位:60時間, 2年生後学期開講)

大原が科目責任者として担当し、演習や講義の一部を成田と助手が分担した。周産期の母子の変化についての、講義演習を行なった。看護過程の演習や事例検討の時間を増やしてほしいと言う要望が見られたため、来年度はシラバスを少し変え演習を増やしたい。授業評価は、分かりやすい授業であるは高く評価がされ、全体に良い・とても良いが8割以上であった。

7) 母性の心理と看護 (1単位:15時間, 3年生後学期開講, 選択科目)

大原が担当し、4年次助産学関連科目受講生選考の際の成績評価科目であり、授業の評価となるレポートの書き方は細かく指導を行なった。前年度は、レポートの作成にあたり2回以上の面接を義務付けたが、今回はそのような義務をなくし、レポート作成上で困難を抱えたときのみの面接とした。受講を希望する学生は全員の受講を受け入れ、さらに、聴講だけを希望する学生も受け入れた。講義後半に、討議の時間を設けたが、活発な討議にはいわず、発言者がいつも同じであった、こま数が少ないこともあり、討議のための時間が長く取れないこともあるが、学生の意見を言うだけでもいいので、学生参加型の講義時間が持てるように今後も努力したい。

8) 助産学概論 (1単位:15時間, 3年次後学期開講, 選択科目)

成田が担当し、上記「母性の心理と看護」と共に、4年次助産学関連科目受講生選考の際の成績評価科目であり、受講を希望する学生は全員受講可能な科目として設定した。26人の学生が受講した。概論として助産学や助産師の基礎概念を押さえると共に、母子医療の現状や課題を国際的な視点、日本国内の視点など、多様な視点から分析し、最終的により焦点化したテーマで各学生がレポートを作成した。レポート作成には複数回の個別指導を行っている。

9) 助産学Ⅰ (1単位:30時間)、助産学Ⅱ (1単位:30時間)、助産診断・技術学Ⅰ (2単位, 60時間)、助産診断技術学Ⅱ (2単位:60時間)、助産管理 (1単位:15時間) (4年次前期開講, 選択科目)

3年次末に選考された15名の学生を対象に講義・演習を行った。

ほとんどの講義を科目責任者の成田が行ったので、学ぶ学生にとって学びやすいような順序性を工夫し、また1週間単位程度で内容がまとまりを持つようにし、必要時小テストで知識の定着を図った。また自己学習を促進するために、事前に予告し、十分な資料収集を促した上で、課題レポートの作成を課した。

助産学では、分娩介助技術を中心とした演習が重要である。演習には講師・助手の協力を得て、基礎的な技術の練習から複雑な技術の練習へと1ヶ月単位で企画し、また演習室を学生に開放し、自己学習を奨励した。

助産学Ⅱに小児科医と助産学研究、助産診断・技術学Ⅰに産婦人科医・臨床心理士・ラクトーションコンサルタント、助産管理に看護管理(看護情報学)研究者に非常勤を依頼し、それぞれの領域の最新の話題について講義していただいた。

10) 助産学実習 (5単位:225時間, 4年次後学期開講, 選択科目)

選考された15名の学生を対象に展開した。主に分娩介助を学ぶ実習施設は当初、自治医科大学附属病院、小山市民病院、済生会宇都宮病院、木村クリニックの4施設で開始したが、開始早々に分娩介助件数の絶対的な不足状況が判明したため、急遽臼井産婦人科に依頼し、5施設での展開となった。分娩介助件数の伸び悩みから、全体では10月11日から12月10日までの9週間という長期間の実習となった。全学生が9例以上の分娩介助を行い、無事実習を終了した。

助産所見学を黄助産院・森田助産院・ままと赤ちゃんの家の3施設に分かれて行い、大草レディースクリニックにおいて助産師外来実習、地域助産師の新生児訪問への同伴実習を行うと共に、地域助産師の育児支援活動に参加した。

11) 卒業研究

成田が10名、大原が5名を担当した。産婦・産褥期の母子支援・母乳育児支援・子を亡くした親・NICU・父親役割・妊娠中絶・思春期の性・

小児のプリパレーション・小児の呼吸管理等のテーマで事例研究・文献研究を行った。助産学実習との絡みからデータ収集は夏休み期間となっていたが、どの学生も熱心に行い、期限内に提出した。

(3) 研究の概要

1) 平成16～17年度文科省科研として「熟練助産師の技としての分娩時モニタリングケアの構造化とその検証」の助成を受けた。平成16年の成果をまとめ、ICM（国際助産師連盟学術集会、ブリスベン）において発表した。また平成17年度末に報告書としてまとめた（成田，大原，岡本）。

2) 児を亡くした家族への助産師による地域拠点型支援プログラム及びシステムの開発」に対し、平成17～19年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））の助成を受け、現在データ収集を行っている（大原，成田，岡本，稲荷，加藤）。

3) 看護学部共同研究費の助成を受けて、「南河内町周辺における地域助産師による育児支援活動」を地域助産師の藤川智子氏の協力を得て実施した。途中その成果を平成17年度自治医科大学シンポジウムにおいて報告した（成田，大原，岡本，稲荷，加藤，藤川）。また研究内で実施したインタビュー調査の結果を、岡本が中心となり「育児支援活動を行う地域助産師のやりがいに影響する要因」にテーマでまとめた（岡本，大原，成田）。

4) 看護学部共同研究費の助成を受けて、母性看護学・小児看護学・成人看護学領域の共同研究として「へき地における成人期にある人々，女性，子どもの健康ニーズに関する研究」を企画した。母性看護学領域においては、離島において子育て中の母親に対するインタビュー調査を行い，また現地調査の実施の可能性の検討として，対象となるへき地を担当する保健師，へき地医療拠点病院看護部長らと2回の会合を持った。これからへき地の全体像と支援の実態の把握の必要性が明らかとなった。本格的な調査は，それぞれの領域に分かれて，次年度以降に推進していくことになった。

(4) その他

1) 成田は，平成17年度実習指導者講習会（主催：栃木県，実施機関：社団法人栃木県看護協会）で助産師教育課程の講義を担当した。

2) 成田は，栃木県看護協会が主催する「看護研

究：基礎編／応用編」の講義及び面接指導を担当した。

3) 成田は，自治医科大学公開講座世話人を前年から引き続いて担当した。

4) 成田は，日本助産師会栃木県支部支部長としてその役割を果たすと共に，日本助産師会渉外担当理事として，厚生労働省に対する要望書等のとりまとめを行った。

5) 成田は，日本看護協会学術誌編集委員会委員として活動した。

6) 成田は，日本母性看護学会理事として，平成17年度に立ち上げられた看護系学会等保険連合看護技術検討委員会に委員として出席し，平成19年度診療報酬改定に向けた看護技術評価の検討会に参加した。

小児看護学

教授 川口千鶴

(1) スタッフの紹介

教授 川口千鶴

講師 朝野春美（2006年3月31日自治医科大学附属病院看護部へ異動）

助手 多田敦子（2006年3月31日退職）

助手 黒田光恵（2005年4月1日成人看護学より異動，2006年3月31日退職）

(2) 教育の概要

第1学年は「小児看護学概論」（15時間），「看護学概論」（15時間）の小児看護学部分を2時間，「成長と発達」（15時間）の小児期部分6時間および「現代保健・看護セミナー」（30時間）を担当した。

第2学年では，「母性・小児保健論」（30時間）の小児保健部分を15時間，「小児臨床看護学」（60時間）を担当した。

第3学年は，「小児看護学実習」（90時間）と「保健・看護研究セミナー」（30時間）を担当した。

第4学年では，「家族生活援助論」（30時間）の4時間および「卒業研究」（120時間）を担当した。なお，卒業研究の担当学生数は12名であった。

(3) 研究の概要

1) 看護学部共同研究として，平成14年度より

「自治医大周辺地域における小児看護の課題」を明らかにする研究を行っている。その一環として、平成17年度は「対象地域における子どもと親・家族に関わる診療所の看護職の認識調査」のテーマで、対象地域の小児科を標榜する診療所で子どもと関わる看護職を対象に、子どもの健康や受診する子どもと家族についてどのような認識を持っているかを調査した。対象となる診療所10箇所の28名の看護職にアンケートを配布し、22名から回答が得られた。その結果、受診する子どもについての状況や看護する上での困難について明らかとなった。

2) 川口が研究分担者になっている文部科学省科学研究費補助金による「子どもの在宅ケアのための組織的プログラムの開発」において、16年度に作成・配布したパンフレットの活用状況の把握およびパンフレットの評価を行った。配布した看護職に対し、アンケート調査とインタビュー調査を行った。その結果、パンフレットについての評価、および今後の示唆が明らかとなった。

(4) その他

1) むつみ愛泉幼稚園において、就園前の幼児と親を対象として行われている子育て支援事業の一つとして「ぴよぴよキッズ育児相談交流会」を企画・運営した。平成17年度は、5回の交流会を実施した。

2) 小児看護に関心がある看護職などを対象に2005年12月7日に学習会を行った。テーマは、「地域でのよりよい生活を支える看護職の実践－医療的ケアを必要とする子どものために－」であった。

成人看護学

教授 中村美鈴

(1) スタッフの紹介

教授 中村美鈴

助教授 水野照美

講師 山本洋子

講師 内海香子

講師 清水玲子 (2005年4月15日就任)

資格：看護師、保健師

学歴：千葉大学看護学部卒業、千葉大学大学院博士前期課程修了 (修士 (看護学))、千葉大学大

学院博士後期課程修了 (博士 (看護学))

職歴：千葉大学医学部附属病院看護師、埼玉県立衛生短期大学助手、千葉県立衛生短期大学非常勤講師

助手 村上礼子

助手 棚橋美紀 (2005年6月1日就任)

資格：看護師、保健師

学歴：杏林大学保健学部看護学科卒業

職歴：横浜市立脳血管医療センター、杏林大学医学部附属病院高度救命救急センター看護師

(2) 教育の概要

1) 成人看護学概論

成人看護学概論は、1年次後学期、2単位30時間の必修科目である。学習目的は、成人がもつ多様な健康上の問題とそれに対する看護の役割、ならびに看護を行う際に役立つ理論を学習し看護の概要を理解することである。成人期における健康問題の多様性、急性期・慢性期など各健康レベルにある成人・家族の看護の概要、セルフケア、危機理論、ケアリング、看護専門職としての看護実践の倫理等、成人看護に必要な知識・理論について講義を行った。中村が14時間、水野が10時間、山本が4時間の講義を担当した。

2) 成人臨床看護学Ⅰ

成人臨床看護学Ⅰは、2年次後学期、2単位60時間の必修科目である。学習目的は、機能障害をもつ成人とその家族の健康への回復と生活への適応に向けて、必要な看護を学習することである。

消化・吸収機能障害、栄養・代謝機能障害、呼吸機能障害、循環機能障害をもつ成人・家族の把握とその方法、ならびに必要な看護について講義と演習を行った。さらに、手術療法を受ける患者の看護、生命の危機状況にある成人の看護、看護過程の展開について、講義と演習を行った。中村が20時間、山本が14時間、内海が10時間、清水が10時間の講義・演習を担当した。

3) 成人臨床看護学Ⅱ

成人臨床看護学Ⅱは、2年次後学期、2単位60時間の必修科目である。学習目的は、機能障害をもつ成人とその家族の健康への回復と生活への適応に向けて、必要な看護を学習することである。内部環境調整機能障害、身体防御機能障害、脳・神経機能障害、感覚機能障害、運動機能障害、性・生殖機能障害をもつ成人とその家族に必要な看護

について講義と演習を行った。さらに、がんを患う患者・家族の看護、事例を用いて看護過程の展開について演習を行った。中村が10時間、水野が22時間、山本が10時間、内海が8時間、清水が6時間の講義・演習を担当した。

4) 成人看護学実習Ⅰ

成人看護学実習Ⅰは、2年次後学期、3単位135時間の必修科目である。学習目的は、健康障害によって入院治療している成人期にある人を多面的に理解し、看護師―患者関係を基盤に看護過程を展開できる基礎的能力を養う、また、実習を通して、看護の機能や役割について理解を深めることである。自治医科大学附属病院の外科系内科系病棟に1グループ6-7名の学生配置で16病棟に分かれて実習を行った。方法は、内科的治療もしくは外科系治療を受ける成人とその家族を1-2名受け持ち、3週間継続して臨地実習を行った。実習中は、カンファレンスを通じて学生が相互に刺激し合い、受け持ち患者の看護や現場での疑問について方向性を見出すなど、成人看護について多くの内容を学び得た。また、看護専門職にふさわしい姿勢・態度を養うことも重要視して指導した。中村は実習全体の統括を行い、他領域の助手ならびに成人看護学の水野、山本、内海、清水、村上、棚橋が実習指導を担当した。

5) 成人看護学実習Ⅱ

成人看護学実習Ⅱは、3年次前学期、3単位135時間の必修科目である。学習目的は、成人看護学Ⅰで経験した看護過程の展開能力を基盤に、既習の専門知識や文献等の知見を取り入れ、成人患者とその家族に必要な看護支援を考えるための能力を高めることである。具体的な実習目的は、「機能障害をもつ成人とその家族の健康と幸せを目指した看護を創造するための基礎的能力を培う」とした。自治医科大学附属病院の成人系病棟に1グループ5名の学生配置で9病棟に分かれて実習を行った。方法は、内科的治療ならびに外科系治療を受ける成人とその家族を受け持ち、3週間継続して臨地実習を行った。実習中は、学生が主体的にテーマカンファレンス或いはケースカンファレンスを行い、活発に意見交換し、受け持ち患者の看護について深く考える機会となった。また、担当教員は、看護専門職としての倫理観、探究的姿勢・態度を培うことを主眼に指導した。学生の臨地実習で成人患者とその家族の体験を実際に知り、

信頼関係を丁寧に育みながら、その人の望む方向に向かって看護支援を実践できるよう取り組んでいた。

中村は実習全体の統括を行うとともに1クール、水野は3クール、山本は3クール、内海は4クール、清水は4クール、村上は4クール、棚橋は2クールの実習指導を行った。

6) フィールド実習

フィールド実習は、3年次後学期、3単位135時間の必修科目である。学習目的は、さまざまな健康レベルおよび生活の場（環境を含む）における看護の役割特性と課題について学習することである。成人看護学領域では、外来看護を主に担当し、次の3点を実習目標とした。①地域で生活しながらさまざまな健康上の問題を持ち、外来を受診する人々への看護の役割を理解する、②救急外来を受診する人々とその家族への看護の役割を理解する、③外来を受診する人々とその家族が地域社会生活を営む上での看護の課題について考えるである。実習方法は、自治医科大学附属病院の総合案内から各科外来へ向かう初診患者、夜間救急外来を受診する患者・家族を担当し看護の役割について理解を深めた。また、看護の課題についてはグループワークを行い、討議ならびに発表で、理解を深められるよう指導した。全員が4週間実習を担当した。

7) 現代保健・看護セミナー

現代保健・看護セミナーは、1年次前学期、1単位30時間の選択科目である。学習目的は、身近な生活や体験の中から、保健および看護につながる問題を見出し、現在の保健および看護が直面する課題に関連づける方法を学習することである。このセミナーは、教員2名がグループワーク、文献学習、討議、見学（必要時）等の方法で、学生の関心のあるテーマを尊重しつつ、学習を深めた。中村は岸講師（地域看護学）、水野は渡邊教授（一般基礎）、山本は水戸教授（老年看護学）、内海は永井教授（精神看護学）、清水は成田教授（母性看護学）とで、それぞれ9-10名の学生を担当した。

8) 保健・看護研究セミナー

保健・看護研究セミナーは、3年次後学期、1単位30時間の選択科目である。学習目的は、保健・看護に関する研究テーマの選び方、研究の進め方について学ぶことである。このセミナーは、学生

が各自関心のある看護に関する文献を検索する方法、ならびに論文を講読し、看護に関するテーマの多様性の理解、討議を通して看護学に対する視野を広げることを小グループ制（1グループ5-6名）で行った。グループワークは、個々の学生が自分の興味ある内容の論文を批判的に読み、その結果を各グループメンバーがプレゼンテーションし、その後討議を行うと言う形式で実施した。中村、水野、山本、内海、清水の5名で、25名の学生を担当した。

9) 卒業研究

卒業研究は、4年次後学期、4単位120時間の必修科目である。学習目的は、「看護の研究の方法や進め方から論文の作成までの過程を体験し、学ぶ」ことである。成人看護学領域では、この目的に「主体的に研究に取り組む姿勢を育む」という点を加え、指導した。担当は、中村、水野、山本、内海、清水の5名で22名の学生を指導した。授業方法は、研究プロセスならびに学習の状況に応じて、ゼミ形式、個別指導、集団指導で行った。研究課題は、学生の関心を尊重し、丁寧に絞り込みを行った。卒業研究全体の進行過程としては、4月末にオリエンテーション、8月上旬に面接法に関するミニ講義、8月末に研究計画書の報告を自主ゼミ式で行った。9月頃からデータ収集開始のための準備・研修・フィールドとの連絡調整を各担当教員が学生とともに実施した。10月以降からは、データの分析、考察、論文作成と、学生は比較的、順調に研究プロセスを体験できた。また、1月の発表会に向けて、ミニ講義を実施した。このように、研究の進行過程の要所でミニ講義を実施し、内容の理解と全体の調和を図った。学生は戸惑いながらも、主体的に研究を進めることができ、論理的に研究が進められるように一緒に考えを整理し、指導してもらったと実感していた。学生の教員に対する評価は、概ね良好であった。成人領域の次年度に向けての課題として、次の4つが浮き彫りになった。①個別の学生理解に基づき、学生個々に対して「伸ばす力」をさらに高めていく。②充実した卒業研究の指導であったが、学生が国家試験や他の科目にも集中できるようにスケジュールを検討する。③ゼミの運営方法をさらに工夫する。④成人看護学実習Ⅰとの指導時期の重なりを減らすよう早めに研究指導を終えるようにする。

(3) 研究の概要

1) 成人看護学における共同研究（平成15、16年度分）では、「化学療法を受ける通院がん患者の家族員が体験する困難」を、自治医科大学看護学部紀要第3巻に原著論文として発表した。

2) 成人看護学における共同研究（平成17年度分）では、救急医療において延命治療の意思決定を患者に代わり行う家族の体験に関する文献検討を行い、研究計画書を作成した。

(4) その他

1) 水野は、2005年2月に、日本がん看護学会第20回学術集会の一般演題口演にて座長を務めた。

2) 中村は、2005年3月に、日本ルーラルナースィング学会の評議員として活動した。

3) 日本ルーラルナースィング学会国際研究集会（2005年4月2日-3日、於：下野市、自治医科大学地域医療情報センター、自治医科大学看護学部）にて、中村、水野、山本、内海、村上が実行委員を務めた。

4) 2005年5月から中村は、昨年度に引き続き栃木県庁健康増進課主催の糖尿病予防対策事業の一環として、新たにピアの手法を導入して若者が同世代の健康教育を促進するためのリーフレット作成委員会のスーパーバイザーを高村教授（一般基礎）と共に務めた。

5) 中村は、2005年8月に栃木県看護協会研修会において、「実際に活用できる看護過程の演習」（12時間）の講義を担当した。

6) 2005年9月に栃木県看護協会臨床指導者講習会において、中村は実習指導の原理（6時間）、水野は、看護論（6時間）の講義を担当した。

7) 中村は、2005年7-9月に4回に渡り、日生病院の「フィジカルアセスメント実践セミナー」（呼吸器系、循環器系、消化器系、神経系）の講師を務めた。

8) 中村は、2005年6月、9月に那須中央病院で、臨床看護師を対象に看護研究に関する講義と研究指導を行った。

9) 中村、水野、内海は、2005年5月、7月11日に塩谷総合病院で、臨床看護師を対象に看護研究に関する講義と研究指導を行った。

10) 中村は、2005年10月27日付～3年間、社団法人看護協会認定看護管理者教育運営委員（セカンドレベル）の委嘱を受けた。

11) 内海は、日本老年看護学会第10回学術集会(2005年11月12日-13日、於：宇都宮、栃木県総合文化センター)にて企画委員を務めた。

12) 中村、水野、村上、棚橋は、日本老年看護学会第10回学術集会(2005年11月12日-13日、於：宇都宮、栃木県総合文化センター)にて実行委員を務めた。

13) 中村は、2005年12月に佐野厚生病院で「看護研究について」というテーマで講演を行った。

14) 中村は、2005年12月に大阪市の看護学校で「これからの臨地実習指導」というテーマで講演を行った。

老年看護学

教授 水戸美津子

(1) スタッフの紹介

教授 水戸美津子

講師 高木初子

講師 亀山直子(2005年4月1日就任)

略歴：看護師。学術修士(放送大学大学院文化科学研究科)・看護学士。神奈川県立循環器呼吸器病センターICU病棟看護師。東京都立墨東病院内科病棟看護師・神経科病棟看護師・リウマチ・膠原病科病棟看護師。山梨県立看護大学助手(老年看護学)を経て着任。

助手 林 美鳥(2006年3月31日退職)

(2) 教育の概要

老年看護学領域では、老年期にある人の病気や障害に焦点をあてるのではなく、加齢現象をふまえて高齢者の発達課題やその健康特性及び健康障害を理解し、それに伴って生じてくる生活障害に関する看護の方法について学ぶと同時に、老年看護技術を取得することを目指して教育実践活動を展開している。

1) 老年看護学に関する教育概要

【老年看護学概論】

老年看護学概論は、2年次前学期2単位の必修科目である。科目の目的は、老年看護学の概念・対象及び老年看護学の役割とその理論を学ぶことである。さらに下位目標として①老年看護学の概念と歴史について理解する、②老年看護学の対象を理解する、③高齢者の健康課題と老年看護の役割

について理解する、④老年看護学の理論的背景について理解することの4点を挙げている。特に高齢者を理解することに重点を置き、演習として高齢者へのインタビュー活動を取り入れている。履修学生数は112名であった。水戸と高木が担当した。

【老年臨床看護学】

老年臨床看護学は、2年次後学期2単位の必修科目である。科目の目的は健康障害をもつ高齢者が日常生活に適応できるよう、高齢者と家族に応じた看護活動を展開するための方法について学ぶことである。さらに下位目標として①高齢者の健康、生活機能レベルの変化と看護活動について理解する、②高齢者の健康障害と経過の特徴について理解する、③高齢者に特有な症候とその看護について理解する、④高齢者に多い疾患と看護について理解する、⑤高齢期ターミナルケアについて理解する、⑥老年看護をめぐる倫理的課題を理解することの6点を挙げている。老年看護技術の理解と修得のため学内演習を積極的に取り入れている。また、老年看護分野は他職種との協働が多く、倫理的態度の育成は特に重要であるとの認識から、倫理的態度の育成のために事例を用いた演習を行っている。履修学生数は102名である。水戸・高木・亀山が担当した。

【老年看護学実習】

老年看護学実習は、3年次前学期2単位の必修科目である。科目の目的は、病院・介護老人保健施設において、疾病や障害をもつ高齢者に対する看護を実践するための基礎知識・技術について学ぶことである。下位目標は①高齢者の身体・心理・社会的特徴を多面的に理解する、②疾病や障害のレベルを理解した上で、高齢者とその家族への個別的援助方法を学ぶ、③保健・医療・福祉の連携の中での看護職の役割と機能について学ぶ、④高齢者ケアの倫理的課題について考察し、援助を行うとしている。3週間実習のうち前半を介護老人保健施設及び通所リハビリテーション施設実習、後半は自治医科大学附属病院で実習であった。病院実習では4病棟を使用し高木(7A整形外科病棟)、亀山(7W神経内科病棟)、林(8E皮膚・アレルギー・リウマチ科病棟)が担当し、残り1病棟(7E脳神経外科病棟)を地域看護学から助手1名(2クール)・基礎看護学から助手1名(3クール)の応援を得て実施した。病院実習では治

療を受ける高齢者を受け持ち、疾病や障害が最後のライフステージにある人に及ぼす影響について理解すること、施設での実習では在宅を見据えた中での高齢者ケアのあり方について考察し、合わせて様々な健康レベルにある高齢者を理解することに重点を置いている。履修学生は98名であった。

【成人・老年保健論】

成人・老年保健論は、2年次前学期2単位の必修科目である。地域看護学春山助教授と水戸で分担し、老年保健論(1単位分)を水戸が担当した。この科目のうち老年保健論の目的は、①高齢者の生活習慣とセルフケア・ヘルスプロモーションについて理解すること、②高齢者の保健・医療・福祉施策について理解すること、③高齢者の健康増進と看護の役割を理解することである。老年保健論では地域で生活する健康な高齢者及び在宅で療養生活を送る高齢者に対する健康増進と健康の維持向上をめざしたマクロ的アプローチについて講義した。履修学生は102名であった。

2) 全領域に関わる教育概要

【看護学概論】

看護学概論は、1年次前学期1単位の必修科目である。7看護学領域の教授が担当し、水戸は、老年期における健康課題について自立や社会生活を拡大するという視点から看護の役割及び機能の理解を目的に1コマ担当した。

【成長と発達】

成長と発達は、1年次後学期1単位の必修科目である。看護系教授4人で担当し、水戸は老年期における“発達”の捉え方を理解し、人生の最終段階における発達課題について学習することを目的に1コマ担当した。

【現代保健・看護セミナー】

現代保健・看護セミナーは、1年次前学期1単位の選択科目である。水戸は成人看護学講師と組み、高木は専門基礎の教授と組み、亀山は基礎看護学教授と組んで、学生の決めたテーマに沿った学習を進めた。

【保健・看護研究セミナー】

保健・看護研究セミナーは、3年次後学期1単位の選択科目である。文献購読を行いグループ内で議論しながら進めた。水戸・高木・亀山が担当した。履修学生数は16名であった。

【卒業研究】

卒業研究は、4年次後学期4単位の必修科目であ

る。老年看護学領域では、前学期の自主ゼミにおいて文献講読等を行い、後学期は学生個々の課題に沿って文献研究・事例研究・調査研究等を行い、グループ内で議論しながらすすめた。履修学生は12名であり、高木・亀山がそれぞれ6名ずつの学生を担当し、水戸は統括指導を担当した。

【基礎看護学実習Ⅰ】

基礎看護学実習Ⅰは、1年次後学期1単位必修科目である。自治医科大学附属病院での5日間の実習である。科目責任は基礎看護学となっており、林が8E(皮膚・アレルギー・リウマチ科病棟)を担当した。担当学生数は6名であった。

【基礎看護実習Ⅱ】

基礎看護学実習Ⅱは、2年次後学期2単位必修科目である。自治医科大学附属病院での10日間の実習である。科目責任は基礎看護学となっており、林が8E(皮膚・アレルギー・リウマチ科病棟)を担当した。担当学生数は6名であった。

【成人看護学実習Ⅰ】

成人看護学実習Ⅰは、2年次後学期3単位必修科目である。自治医科大学附属病院での15日間の実習である科目責任は成人看護学となっており、林が8E(皮膚・アレルギー・リウマチ科病棟)を担当した。担当学生数は6名であった。

【フィールド実習】

フィールド実習は、3年次後学期3単位必修科目である。在宅看護フィールド実習、学校・産業フィールド実習、外来・救急看護フィールド実習、へき地フィールド実習で構成されている。科目責任は地域看護学となっており、高木がハート訪問看護ステーション、亀山がわくわく訪問看護ステーションおやま、林が訪問看護ステーションたんぽぽを担当した。水戸は企画と最終カンファレンスに出席した。

3) 教育上での他機関との交流

【大学院での研究指導】

水戸は、山梨県立看護大学大学院看護学研究科地域老年看護学分野専攻の大学院生1名を客員教授として研究指導し修了させた。その修士論文テーマは「要介護高齢者の褥瘡予防に関する研究－看護師による褥瘡予防行動のプロセス－」であった。さらに、放送大学大学院文化科学研究科で客員教授として院生1名の研究指導にあたっている(平成18年度継続)。

【大学院特別講義】

水戸は、富山医科薬科大学大学院看護学研究科非常勤講師として、精神看護学演習のうち2コマで質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) について講義した。

(3) 研究の概要

老年看護学領域では自治医科大学看護学部共同研究費による研究として、附属病院看護部整形外科病棟の看護師らと、研究課題「高齢者大腿骨頸部骨折患者の術後の生活行動拡大のプロセスに関する研究—退院後の面接調査からの分析—」に取り組み、データの収集・分析を行った。現在も継続中である。

また、水戸を代表とした臨床看護研究会を立ち上げ、栃木県内の臨床看護師とともに、月2回の研究会を行っている。

水戸は、日本福祉工学会理事ならびに査読委員長を務めた。水戸は、実践的グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) 研究会の会長として活動し、亀山は研究会の事務局を務めた。また、水戸は、第5回公開研究会では「修正版：グラウンデッド・セオリー・アプローチの分析技法」を講演した。

水戸・亀山は、山梨県立看護大学大学院の教員らと「看護職者の生涯学習ニーズとその支援状況」の共同研究に取り組んだ。これは、3つの分担研究から構成されており、水戸は「一般看護職を対象とした調査」の分担責任者として活動した。平成17年2月18日、山梨県立看護大学大学院共同研究報告会「山梨県内の看護職者の生涯学習ニーズとその支援状況」を開催。また、山梨県立看護大学看護生涯学習研究班として、平成18年3月に「山梨県における看護職者の生涯学習ニーズとその支援」を出版した。

(4) その他

1) 水戸は、市民大学等の講師、看護協会主催の研修会の講師、福祉職等に対する研修会講師、患者会活動への支援、自治体事業への協力等の活動を行った。その内容は以下の通りである。

【市民大学等の講師】

平成17年12月、おやま市民大学において「わが身の問題！快適な住まいは転倒を予防する—転ばぬ先の杖—」を講義した。

【看護協会主催の研修会の講師】

平成17年9月、栃木県看護協会主催の実習指導者講習会において「看護師教育課程 (大学)」「実習指導の原理」について講義した。

平成17年10月、栃木県看護協会主催の看護職員実務研修会で「リーダーシップについて」を3箇所で開催した。

平成17年11月、山梨県看護協会主催訪問看護師研修会で「事例検討」について講義した。

平成18年2月、山梨県看護協会主催の訪問看護師継続研修会で「ターミナルケア」について講演した。

【他病院等の講師】

平成18年3月、埼玉協同病院において「高齢者の理解と老年看護」を講演した。

【福祉職等に対する研修会の講師】

平成17年9月、山梨県長寿やまなし財団の身体拘束解消推進事業において「身体拘束解消の認識のための基礎知識」を講演した。

平成17年10月栃木県認知症介護実務者研修会講師として「家族への相談援助」を講義した。

平成17年12月認知症高齢者グループホーム管理者研修会「認知症高齢者の生活支援の方法」を講演した。

【患者会活動への支援】

平成17年12月、平成18年2月「在宅介護者家族の会」県組織結成準備会へ出席をした。

【自治体事業への協力】

平成12年より、山梨県身体拘束解消推進会議議長として事業の企画への参加、身体拘束解消推進事業のアドバイザー、研修会講師として高齢者ケアに従事する人たちへの教育・啓蒙活動をしている。

【看護学部主催臨床指導者研修会】

平成17年8月及び10月の2回、看護学部主催による臨床指導者研修会において「看護教育学」を講義した。

2) 高木は、平成17年9月、栃木県看護協会主催の実習指導者講習会において「実習指導の評価」を講義した。

研究業績録

学 部 長

(4) その他

1) 野口美和子, 根本敬子, 酒井郁子, 天津栄子, 佐藤弘美, 大塚真理子, 丸山優, 坂田直美, 小野幸子, 湯浅美千代: 介護保険施設における痴呆症をもつ入所者に関するリスクマネジメントの導入と理論化, 平成14~17年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書.

一般基礎

(1) 原著論文

1) 平田乃美, 渡邊亮一: 大規模教室での講義型授業に対する看護学生のニーズと授業評価ープレゼンテーションソフトウェアを用いた心理学科目の受講生を対象としてー. 自治医科大学看護学部紀要, 4:41-49, 2005.

2) 本田 暁, 大塚公一郎, 山家邦章, 加藤 敏, 中村好一, 辻 恵介, 阿部 裕: 在日日系ブラジル人における精神障害の文化社会的リスクファクター. 日本社会精神医学会雑誌, 14:45-54, 2005.

(2) 学会発表

1) 前田ひとみ, 青柳 宏, 石田登喜子, 渡辺純一, 高村寿子: 思春期の性=生の健康教育(1)ーピアカウンセラー養成講座のカリキュラム並びに教材評価ー. 第24回日本思春期学会総会学術集会, 埼玉, 2005年8月22日. (第24回日本思春期学会総会学術集会抄録集, 109, 2005)

2) 橋本充代, 中出佳操, 前田ひとみ, 石田登喜子, 高村寿子: 思春期の性=生の健康教育(2)ーピアカウンセリング手法による性教育受講生(中・高生)の方法及び教材に関するニーズ調査ー. 第24回日本思春期学会総会学術集会, 埼玉, 2005年8月22日. (第24回日本思春期学会総会学術集会抄録集, 110, 2005)

3) 石田登喜子, 前田ひとみ, 青柳 宏, 渡辺純一, 角田哲男, 高村寿子: 思春期の性=生の健康教育(3)ーピアカウンセラー養成講座の教材開発ー. 第24回日本思春期学会総会学術集会, 埼玉, 2005年8月22日. (第24回日本思春期学会総会学術集会抄録集, 111, 2005)

4) 渡辺純一, 前田ひとみ, 石田登喜子, 橋本充

代, 高村寿子: 思春期の性=生の健康教育(4)ーピアカウンセリング活動支援システムの構築ー. 第24回日本思春期学会総会学術集会, 埼玉, 2005年8月22日. (第24回日本思春期学会総会学術集会抄録集, 112, 2005)

5) 高村寿子: 世代を超えて支える子どもの健康, 市民公開講座「これからの子育て」. 第24回日本思春期学会総会学術集会, 埼玉, 2005年8月20日. (第24回日本思春期学会総会学術集会抄録集, 12, 2005)

6) 信川益明, 稲田 紘, 大槲陽一, 大道 久, 笈淳夫, 河口 豊, 北村昌之, 白髪昌世, 須古博信, 鈴木莊太郎, 関田康慶, 寺崎 仁, 長澤 泰, 名和 肇, 橋本廸生, 福田 敬, 舟谷文男, 山内一信, 渡辺一平, 渡邊亮一: 保健・医療・福祉の連携推進システム構築の方法論と評価手法の開発に関する研究. 第43回日本病院管理学会学術総会, 東京, 2005年10月27日. (第43回日本病院管理学会学術総会演題抄録集 96, 2005)

7) Otsuka K, Kato S: Globalization and depression among Japanese Brazilians in Japan. 13th World Congress of Psychiatry. September 11, 2005, Cairo Egypt (Congress Abstracts : p.384, 2005)

8) 大塚公一郎, 加藤 敏: 長期透析患者における病いの受容ー約20年の透析後に幻覚・妄想を呈した1症例からー. 第18回日本総合病院精神医学会総会, 松江, 2005年11月11日. (総合病院精神医学誌, 17(suppl.):129, 2005)

(3) 著書・総説

1) 高村寿子(編著): 思春期の性の健康を支えるピアカウンセリング・マニュアルーピアカウンセラー養成者・コーディネーター(調整役)版. 小学館, 2005.

2) 高村寿子(編著): 思春期の性の健康を支えるピアカウンセリング・マニュアルーピアカウンセラー(学生)版. 小学館, 2005.

(4) その他

1) 高村寿子: ピアカウンセリングにおけるパートナーシップ. 日本精神保健社会学会年報, 11(10):13-18, 2005.

2) 高村寿子, 前田ひとみ, 石田登喜子, 青柳 宏, 渡辺純一, 角田哲男, 橋本 充, 中出佳織, 堀江重郎: 思春期保健教育の教材開発に関する研

究報告書. 平成17年度厚生労働科学研究報告書, 2005.

3) 明石浩史, 合地 明, 信川益明, 根東義明, 渡邊亮一, 朴 勤植, 羽田隆吉, 大原 信, 横井英人, 岸 真司: 2005年度医療情報技師短期整理講習会スライド集-医学・医療系-. pp.3-16, 日本医療情報学会医療情報技師育成部会, 2005.

4) 赤澤宏平, 太田吉夫, 立石憲彦, 廣瀬康行, 中川 肇, 仲野俊成, 村田晃一郎, 山内一史, 山本和子, 渡邊亮一: 2005年度医療情報技師短期整理講習会スライド集-医療情報システム系-. pp.42-54, 日本医療情報学会医療情報技師育成部会, 2005.

専門基礎

(3) 著書・総説

1) 竹田津文俊 (2005)

栄養摂取・吸収・代謝・排泄機能の障害 1

In: 疾病の成り立ちと回復の促進: 放送大学テキスト

2) 竹田津文俊 (2005)

栄養摂取・吸収・代謝・排泄機能の障害 2

In: 疾病の成り立ちと回復の促進: 放送大学テキスト

基礎看護学

(1) 原著論文

1) Aoki K, Yokoi M, Masago R, Iwanaga K, Kondo N, Katsuura T: Modification of internal temperature regulation for cutaneous vasodilation and sweating by bright light exposure at night. *European Journal of Applied Physiology*, 95: 57-64, 2005.

2) 大久保祐子, 豊田省子, 里光やよい, 亀田真美, 角田こずえ, 田口ヨウ子, 野中 静: 知識創造と看護実践できる学生を育てるためのSECIモデルに基づく基礎看護学技術演習の検討. 自治医科大学看護学部紀要, 3: 51-65, 2005.

3) 里光やよい, 田口ヨウ子, 豊田省子, 亀田真美, 角田こずえ, 大久保祐子, 野中 静: 看護におけるコミュニケーション-基礎看護学実習レポートの分析-, 自治医科大学看護学部紀要,

3: 67-83, 2005.

(2) 学会発表

1) 清水裕子, 鈴木玲子, 大久保祐子, 里光やよい, 横井郁子, 梅村美代志, 大学和子, 豊田省子, 菊池麻由美: 交流セッション 看護教育における模擬患者とは..., 日本看護学教育学会, 埼玉, 2005年7月24日. (日本看護学教育学会誌15: 300, 2005)

2) 小長谷百絵, 大久保祐子, 小川鑑一, 國澤尚子: 医療用粘着テープによるかぶれを防止する剥離方法の検討-剥離時に皮膚を指で押さえた場合と押さえない場合の比較-. 第7回日本褥瘡学会学術集会, 横浜, 2005年8月26日. (日本褥瘡学会誌7(3): 573, 2005)

3) 中村裕美, 真砂涼子, 中村光江, 習田明裕, 酒井美絵子, 杉尾節子, 菊地美佐子, 志々岐康子: 電子カルテを利用した臨地看護学実習を支援する教育方法に関する研究 (第1報). 第14回日本保健科学学会学術集会, 東京, 2005年9月9日 (第14回日本保健科学学会学術集会抄録集: 12, 2005)

4) 中村裕美, 中村光江, 真砂涼子, 習田明裕, 酒井美絵子, 杉尾節子, 菊地美佐子, 志々岐康子: 電子カルテを利用した臨地看護学実習を支援する教育方法に関する研究 (第2報). 第14回日本保健科学学会学術集会, 東京, 2005年9月9日. (第14回日本保健科学学会学術集会抄録集: 12, 2005)

5) 中原るり子, 里光やよい: 看護学生の与薬エラー予防訓練における教員SPの効果, 日本予防医学リスクマネジメント学会年次総会, 東京, 2005年9月16日. (第3回日本予防医学リスクマネジメント学会学術総会抄録集: 30, 2005)

6) 里光やよい, 額額葉月, 須釜なつみ, 市塚京子, 佐藤淳子, 鈴木照実, 古橋洋子: 中堅看護師の専門職意識の芽ばえ過程-看護師のキャリアアップに影響を及ぼすもの. 日本看護科学学会, 青森, 2005年11月18日. (第25回日本看護科学学会学術集会講演集: 167, 2005)

(3) 著書・総説

1) 玉木ミヨ子編, 秋葉公子, 臼井恵美, 蒲生澄美子, 今野葉月, 里光やよい, 関口恵子, 玉木ミヨ子, 藤島和子, 宮崎素子: イラストで見る診る看護基礎看護学 (第3版). 204-225, 医学評論社

(東京), 2005.

(4) その他

1) 松田たみ子: 日本ルーラルナース学会国際研究集会において, 分科会「へきちにおけるネットワーク作りと研究」のファシリテーターをつとめた。

2) 真砂涼子: パート3事例編在宅でのアセスメント, 成人看護学ヘルスアセスメント (横山美樹, 石川ふみよ編), ヌーヴェルヒロカワ (東京), 291-301, 2005.

地域看護学

(1) 原著論文

1) 春山早苗, 鈴木久美子, 佐藤幸子, 岸恵美子, 篠澤悦子: へき地の健康危機管理体制づくりにおける保健所保健師の機能・役割 —診療所看護職の活動の現状と認識から—, 自治医科大学看護学部紀要, 3: 3-17, 2005.

2) 高崎絹子, 岸恵美子, 吉岡幸子, 小野ミツ, 田中荘司, 多々良紀夫: 在宅高齢者に対する虐待事例の「深刻度」とその関連要因—全国の実態調査をもとにして—, 高齢者虐待防止研究, 1(1): 79-89, 2005.

3) 岸恵美子, 神山幸枝, 鱒淵清子, 柿沼澄子, 佐竹由佳子, 青山初枝, 伊沢佐登美, 矢野弥生, 吉井由美, 今里澄江, 川崎光子: 保健福祉行政サービスの充実にかかわる保健師が発揮している看護の機能, 自治医科大学看護学部紀要, 3: 85-97, 2005.

(2) 学会発表

1) 春山早苗, 佐藤幸子, 鈴木久美子, 舟迫香, 岸恵美子, 篠澤悦子, 錦織正子, 松永敏子, 藤本眞一, 牛尾裕子, 宮崎美砂子: へき地の健康危機管理体制づくりにおける保健所保健師の機能・役割, 第64回日本公衆衛生学会総会, 札幌市, 2005年9月15日. (第64回日本公衆衛生学会総会抄録集, 453, 2005)

2) 鈴木久美子, 岡本美香子, 舟迫香, 関澄子, 佐藤幸子, 高木初子, 岸恵美子, 春山早苗, 篠澤悦子: 小規模離島における住民のヘルスニーズ, 第64回日本公衆衛生学会総会, 札幌市, 2005

年9月16日. (第64回日本公衆衛生学会総会抄録集, 514, 2005)

3) 武藤紀子, 宮崎美砂子, 牛尾裕子, 春山早苗, 錦織正子, 松永敏子, 藤本眞一, 石川麻衣, 山田洋子: 保健所企画調整部門に所属する保健師の健康危機管理における機能・役割の検討, 第64回日本公衆衛生学会, 札幌市, 2005年8月 (日本公衆衛生雑誌52(8): 453).

4) Miyazaki M., Muto N., Ushio Y., Haruyama S., Nishigori M., Matsunaga T.: Disaster Management in the Community Setting: The Experienced Activities of Japanese Public Health Nurses, THE 3RD INTERNATIONAL CONFERENCE ON COMMUNITY HEALTH NURSING RESEARCH, Tokyo, October 2005 (Program and Abstracts 152).

5) 菊池睦子, 後藤光代, 葉真寺美佐子, 岸真知子, 工藤祝子, 高田敏江, 中田明江, 春山早苗, 鈴木久美子: へき地等地域病院への派遣が看護実践能力向上にもたらす教育的効果, Rural and Remote Area Nursing国際研究集会, 栃木県南河内町, 2005年4月2日.

6) 清水裕子, 遠間恭子, 松井千浩, 山田佳子, 大河原温子, 佐藤幸子, 春山早苗: キャリアラダー表の導入 (第2報) —看護職員 (スタッフ, 看護マネジャー) への影響—, 第9回日本看護管理学会, 神戸市, 2005年8月 (第9回日本看護管理学会抄録集200-201).

7) 遠間恭子, 清水裕子, 松井千浩, 山田佳子, 大河原温子, 佐藤幸子, 春山早苗: キャリアラダー表の導入 (第1報) —導入の経緯と方法—, 第9回日本看護管理学会, 神戸市, 2005年8月 (第9回日本看護管理学会抄録集198-199).

8) Ushio Y., Ishikawa M., Miyazaki M., Haruyama S., Nishigori M., Matsunaga T.: Current State of The Activities of Municipal Public Health Nurses Related to Disaster Management, THE 3RD INTERNATIONAL CONFERENCE ON COMMUNITY HEALTH NURSING RESEARCH, Tokyo, October 2005 (Program and Abstracts 153).

(3) 著書・総説

1) 岸恵美子: 虐待ハイリスク親子のためのグループ活動, クリニカルプラクティス, 24(6): 64-67, 2005

2) 日本看護科学学会 看護学学術用語検討委員

会 第6期委員会 川島みどり, 数馬恵子, 他9名, ワーキンググループメンバー 牛久保美津子, 他30名 第7期委員会 数馬恵子, 太田勝正, 他14名, ワーキンググループメンバー 赤沼智子, 伊藤龍子, 飯村直子, 上野まり, 他17名, 春山早苗, 平林優子, 他10名: 第1版看護行為用語分類, 74-76, 205-206, 248-262, 266-267, 270-273, 289-292, 295-296, 301, 305-314, 378-379, 日本看護科学学会, 2005.

(4) その他

1) 春山早苗, 篠澤倪子, 岸恵美子, 鈴木久美子, 佐藤幸子, 舟迫香: へき地の健康危機管理体制づくりにおける保健所保健師の活動方法. 厚生労働科学研究費補助金(健康科学総合研究事業)地域の健康危機管理における保健所保健師の機能・役割に関する実証的研究 平成16年度総括・分担研究報告書11-19, 2005.

2) 春山早苗: 地域の健康危機管理における保健所保健師の活動指針, 厚生労働科学研究費補助金(健康科学総合研究事業)地域の健康危機管理における保健所保健師の機能・役割に関する実証的研究 平成14~16年度 総合研究報告書(別冊), 23-25, 2005.

3) 篠澤倪子: 栃木県看護協会保健師職能プログラム, シンポジウム「保健師現任教育あり方」~地域で生きる保健師を育てるために~において, 「教育の現場から教育の現状と新規採用保健師を受け入れる職場に期待すること」というテーマでシンポジストを務めた. 2005年6月

4) 春山早苗: 看護論. 栃木県看護協会実習指導者講習会, 2005年9月.

5) 菊池睦子, 後藤光代, 薬真寺美佐子, 岸真知子, 工藤祝子, 高田敏江, 中田明江, 春山早苗, 鈴木久美子: へき地等地域病院への派遣が看護実践能力向上にもたらす教育の効果, 日本ルーラルナース学会国際研究集会, 南河内町, 2005年4月.

6) 篠澤倪子: 日本ルーラルナース学会国際研究集会において, 分科会「へき地における看護実践と看護教育」のファシリテーターを務めた.

7) 春山早苗: 保健師の行う地域ケア体制づくりという看護実践をどう研究するか, 千葉大学看護学部創立30周年記念シンポジウム 看護実践を研究するー質的研究方法に焦点を当ててー, 千葉市,

2005年9月.

精神看護学

(1) 原著論文

1) 永井優子: 糖尿病をあわせもつ精神障害者のセルフケアを促進する看護に関する研究. 平成16年度千葉大学大学院看護学研究科博士論文, 2005.

(4) その他

1) 関澄子, 永井優子, 西岡和代, 日向朝子: 精神看護学実習前後における精神看護に対する実践意欲の変化. 自治医科大学看護学部紀要, 3; 99-107, 2005.

2) 永井優子: 家族との援助関係を築くとはー中立的立場を超えて, 家族とのパートナーシップ形成に基盤となる考え方. 家族看護, 4(1); 20-24, 2006.

母性看護学

(1) 原著論文

1) 前原邦江, 岩田裕子, 野々山未希子, 遠藤恵子, 三隅順子, 鈴木幸子, 成田伸, 松原まなみ: 産褥早期の母乳育児支援において対応を決定する上で助産師が考慮する要因ー提示した事例へのケア選択理由の分析からー. 日本母性看護学会誌, 5(1); 72-79, 2005.

2) 岡本美香子, 大原良子, 曾我部美恵子, 橋本かおり, 成田伸, 遠藤恵子, 三澤寿美, 川崎佳代子: 栃木県の保育所における母乳育児支援の実態ー母乳育児支援に関する基礎教育受講の有無が保育に与える影響に焦点をあててー. 自治医科大学看護学部紀要3; 109-125, 2005.

3) 大原良子, 成田伸, 岡本美香子, 野口美和子: オーストラリアのルーラル看護・遠隔地看護の日本における応用の可能性について. 自治医科大学看護学部紀要3; 127-137, 2005.

4) 佐藤好恵, 成田伸, 中野隆: 殿部への筋肉内注射部位の選択方法に関する検討. 日本看護研究学会雑誌28(1); 45-52, 2005.

5) Ryoko Ohara, 'Interminable hell': Hiroshima's nurses remember the atomic bomb, Nursing Inquiry, 12(4); 303-305, 2005.

(2) 学会発表

- 1) Narita,S., Ohara,R., Hashimoto,K., Okamoto,M., Tsuru,S., Sakanashi,K., Saito,I., Murakami,M. : What does the expert nurse-midwife monitor during labor and delivery in Japan?. 27th Congress of the International Confederation of Midwives Congress, proceedings Brisbane, Australia, 24-28 July 2005.
- 2) Ohara,R., Rudge,T., Ando,Y., Okamoto,M., Hashimoto,K., Sokabe,M., Hyakuta,Y., Kawasaki,K., Miyakoshi,Y., Narita,S. : History of midwives in Hiroshima at 1899 to 1910. 27th Congress of the International Confederation of Midwives Congress proceedings : p 458-459, Brisbane, Australia, 24-28 July 2005.
- 3) Tsuru,S., Narita,S., Watanabe,C., Satou,E., Murakami,M., Ohhara,R., Kudoh,T., Miyazawa,J., Dannoue,H.: Development of electric progress table supporting women during labor and delivery in hospitals by team of medical and midwifery staffs using Japan standard master file for nursing practice. 27th Congress of the International Confederation of Midwives, Congress proceedings;469-471, Brisbane, Australia, 24-28 July 2005.
- 4) 曾我部美恵子, 佐藤千加子, 村田美穂, 成田伸, 大原良子, 岡本美香子: 褥婦の避妊行動の実態に関する調査. 栃木県母性衛生学会, 平成17年5月14日 (宇都宮市) (栃木母性衛生32;22-25, 2006)
- 5) Ohara,R., Trudy Rudge : Nurses'experiences in Hiroshima at 6 August 1945, 3rd international Nursing History conference, Abstract:50, Melbourne, Australia, 27August, 2005.

(3) 著書・総説

- 1) 成田伸: 産褥期の看護Ⅰ－産褥早期 (入院中) の褥婦と家族のアセスメントとケア, pp.127-144 / 産褥期の看護Ⅱ－家庭での褥婦と家族のアセスメントとそのケア, pp.145-159; 小松美穂子, 吉沢豊予子, 佐藤喜根子, 坂間伊津美, 跡上富美, 成田伸, 近藤好江, 森恵美: 放送大学印刷教材「母性看護学」, 放送大学教育振興会出版部 (東京), 2005.

(4) その他

- 1) 川崎佳代子, 遠藤恵子, 三澤寿美, 成田伸,

曾我部美恵子, 大原良子, 岡本美香子, 松原茂樹: 栃木県における母乳育児支援の実態調査第2部支援提供者編. 平成14年度自治医科大学看護学領域共同研究報告書・平成15-17年度文部科学省研究中間報告書 (基盤研究(C)(2)), 2005.

2) 江川隆子, 荻野敏, 奥宮暁子, 宮川潤一郎, 成田伸, 田中マキ子, 小平京子, 本田育美, 紙野雪香, 木村義, 熊倉昌彦, 上原淳子, 武田岳雪: 糖尿病性神経・血管合併症に関する新しい看護診断指標の地域間格差の研究. 平成13~16年度科学研究費補助金 (基盤研究(B)(2)) 研究成果報告書, 2005.

3) 宮腰由紀子, 奥宮暁子, 泉キヨ子, 石鍋圭子, 野々村典子, 川崎裕美, 大原良子, 松成裕子, 藤井宝恵: リハビリテーション専門看護師養成カリキュラムの開発, 平成15~16年度科学研究費補助金 (基盤研究(B)(2)) 研究成果報告書, 2005.

小児看護学

(2) 学会発表

- 1) 朝野春美, 川口千鶴, 多田敦子, 加藤晶子: 救急外来において子どもや親・家族とかわる看護職の認識. 日本小児看護学会第15回学術集会, 横浜. 2005年7月24日.
- 2) 多田敦子, 朝野春美, 川口千鶴: 小児看護学実習の日程の違いによる学生の実習に対する意識への影響. 聖路加看護学会第10回学術大会, 東京. 2005年9月24日. (聖路加看護学会誌, 9(2), 69, 2005)

(4) その他

- 1) 鈴木千衣, 横山由美, 及川郁子, 平林優子, 田村佳士枝, 川口千鶴, 小原美江, 石井由美: 慢性・長期的健康問題をもつ子どもと家族の日常生活と社会資源の活用: 福島県立医科大学看護学部紀要, 7, 13-24, 2005.
- 2) 澤田和美, 川口千鶴, 日沼千尋, 奥野順子, 仁志田博司, 臼井雅美, 関森みゆき, 石川真理子, 宗村弥生: 研究の概要. 乳幼児の事故に関連する養育者の要因に関する研究－乳幼児の生活行動範囲の視点から. 平成13年度~平成15年度科学研究費補助金 (基盤研究(C)(2)) 研究成果報告書, 3-5, 2005.

- 3) 奥野順子, 川口千鶴, 澤田和美, 宗村弥生, 関森みゆき, 日沼千尋, 白井雅美, 石川眞理子: 乳幼児の事故の実態-14日間の事故の記録から. 平成13年度~平成15年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, 14-21, 2005.
- 4) 関森みゆき, 奥野順子, 川口千鶴, 白井雅美, 澤田和美, 日沼千尋, 石川眞理子: 乳幼児の事故と予防に関する調査-事故と家庭における安全対策との関連から. 平成13年度~平成15年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, 30-36, 2005.
- 5) 白井雅美, 澤田和美, 川口千鶴, 関森みゆき, 奥野順子, 日沼千尋, 石川眞理子: 乳幼児の事故に影響を及ぼす対象者の特性との関連-子ども側と養育者側との要因から. 平成13年度~平成15年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, 37-41, 2005.
- 6) 澤田和美, 川口千鶴, 白井雅美, 奥野順子, 関森みゆき, 日沼千尋, 石川眞理子, 宗村弥生: 乳幼児の事故予防プログラムの評価-事故実態の介入群非介入群の比較. 平成13年度~平成15年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, 50-53, 2005.
- 7) 関森みゆき, 白井雅美, 奥野順子, 川口千鶴, 澤田和美, 日沼千尋, 宗村弥生, 石川眞理子: 乳幼児の事故予防プログラムの評価-対象の背景と介入前後の事故変化との関連から. 平成13年度~平成15年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, 54-63, 2005.
- 8) 日沼千尋, 澤田和美, 白井雅美, 関森みゆき, 宗村弥生, 奥野順子, 川口千鶴, 石川眞理子: 乳幼児の事故予防プログラムの評価-介入群と非介入群の安全対策実施率の比較から. 平成13年度~平成15年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, 64-66, 2005.

成人看護学

(1) 原著論文

- 1) NAKAMURA M, KIDO Y, YANO M, HOSOYA Y: Development of a scale to assess postoperative dysfunction after upper gastrointestinal carcinoma resection: reliability and validity. Surgery Today, 35: 535-542, 2005.

2) 中村美鈴, 城戸良弘: 上部消化管がん患者の手術後の生活で困っている内容とその支援. 自治医科大学看護学部紀要, 3: 19-31, 2005.

3) 水野照美, 村上礼子, 中村美鈴, 山本洋子, 塚越フミエ: 化学療法を続ける通院がん患者の家族員が体験する困難. 自治医科大学看護学部紀要, 3: 33-40, 2005.

4) 清水安子, 黒田久美子, 内海香子, 正木治恵: 糖尿病患者のセルフケア能力の要素の抽出 看護効果測定ツールの開発に向けて. 千葉看護学会会誌, 11(2): 23-30, 2005.

(2) 学会発表

- 1) Nakamura M: Process of developing a scale to assess dysfunction after upper gastrointestinal cancer (preliminary version): reliability and validity. The 23rd International Nursing Conference, Taiwan. May. 23-24, 2005 (Abstracts CD-ROM 2005)
- 2) 水野照美, 佐藤禮子: がん性疼痛があり通院治療を続ける患者への看護援助. 第19回日本がん看護学会学術集会, 仙台. 2005年2月6日. (日本がん看護学会誌 第19回日本がん看護学会学術集会講演集 19(Supplement): 177, 2005)
- 3) 細谷好則, 中村美鈴, 城戸良弘, 矢野雅彦, 永井秀雄, 門田守人: 食道癌頸部リンパ節郭清の有無による術後機能障害の客観的評価. 第59回日本食道学会, 東京. 2005年7月1日. (日本食道学会学術集会プログラム・抄録集; 189, 2005)
- 4) 中村美鈴, 高村寿子, 矢板橋チヅ子, 渡辺晃紀, 木崎明子, 塚田三夫: 学生有志による同世代の生活習慣病予防に対する啓発資料作成の試み. 第63回日本公衆衛生学会, 北海道. 2005年9月15-16日. (看護診断9(2): 98-99, 2004)
- 5) 中村美鈴, 城戸良弘: 上部消化管がん患者の術後機能障害評価尺度の開発過程と信頼性・妥当性. 第23回日本看護科学学会, 青森. 2005年11月17日. (日本看護科学学会誌 第25回日本看護科学学会学術集会講演集; 151, 2005)

(3) 著書・総説

- 1) 中村美鈴編集: NEWわかる! できる! 急変時ケア (改訂版). 学習研究社 (東京), 2005.
- 2) 中村美鈴: ナーシンググラフィカ 成人看護学, 健康危機状況, 第2章「病棟入院患者」(第1版). メディカ出版 (大阪), 162-174, 2005.

3) 中村美鈴：急変時のフィジカルアセスメント，NEWわかる！できる！急変時ケア（中村美鈴編集），学習研究社，10-15，2005.

4) 中村美鈴：学生の自己効力感を高めるような指導により看護実践に成果を認めた成功例，実習指導と看護教員，日総研出版（名古屋），1(6)；81-85，2005.

5) 中村美鈴：新任実習指導者のための「実習指導者の役割」の概要—どう学生に関わるか—，実習指導と看護教員，日総研出版（名古屋），1(6)；81-86，2005.

6) 中村美鈴：新任実習指導者のための「実習指導者の役割」の理解と実践指導場面における教育的かわり，実習指導と看護教員，日総研出版（名古屋），1(6)；81-87，2005.

7) 内海香子：最新・高齢者看護プラクティス 疾病・障害をもつ高齢者 第6章 治療・処置と看護 ①薬物両方を受ける高齢者への援助（金川克子，野口美和子監修），中央法規出版（東京），200-207，2005.

8) 江川隆子，本田育美，笠岡和子，鷹井清吉，奥津文子（執筆協力 山本洋子，清水久美子，宮崎澄江，酒井京子，戸沢ゆみ子，塚野倫子，熊原澄江）：ゴードンの機能的健康パターンに基づく看護過程と看護診断 第2版，ヌーヴェルヒロカワ（東京），37-39，2005.

(4) その他

1) 中村美鈴，高村寿子，矢板橋チヅ子，渡辺晃紀，木崎明子，塚田三夫：学生有志による同世代の生活習慣病予防に対する啓発資料作成の試み，第43回栃木県公衆衛生学会，宇都宮，2005年9月9日。（第43回栃木県公衆衛生学会抄録集；26-27，2005）

2) 山本洋子，村上礼子，水野照美，中村美鈴：成人看護学における看護過程演習方法の工夫と学生の学習達成度，第4回自治医科大学シンポジウム，栃木，2005年9月17日。（第4回自治医科大学シンポジウム ポスターセッション記録集；45，2005）

3) 村上礼子，山本洋子，水野照美，中村美鈴：成人看護学における看護過程演習に対する学生の反応ならびに意見と今後の課題，第4回自治医科大学シンポジウム，栃木，2005年9月17日。（第4回自治医科大学シンポジウム ポスターセッション

記録集；46，2005）

4) 中村美鈴，城戸良弘：上部消化管がん患者の術後機能障害評価尺度32項目の開発とその有用性ならびに信頼性・妥当性の検討，第13回近畿輸液・栄養研究会，大阪，平成17年10月15日。（近畿輸液・栄養研究会抄録集；100，2005）

5) 森川浩子，出野慶子，稲垣美智子，内海香子，江川隆子，大谷由香，兼松百合子，黒江ゆり子，古賀久美子（平成15年度のみ），清水安子，多崎恵子，土屋陽子，友竹千恵（平成15年度のみ），中村伸江，野口美和子，藤澤まこと，普照早苗，正木治恵，村角直子：日本における糖尿病自己管理アウトカム指標の開発 平成15度～平成16年度 文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C）(1)）報告書，研究代表者 森川浩子，2005.

老年看護学

(1) 原著論文

1) 亀山直子，水戸美津子：臨地実習指導者の教育活動と学習ニーズ—2003年度東京都実習指導者研修受講者を対象とした調査—，山梨県立看護大学紀要，第7巻第1号；31-42，2005年2月.

(2) 学会発表

1) 高木初子，水戸美津子，林 美鳥：高齢者擬似体験後のグループ学習の評価，第15回日本看護学教育学会，大宮市，2005年7月24日.

2) 鈴木久美子，佐藤幸子，舟迫 香，岡本美香子，高木初子，岸恵美子，春山早苗，篠澤侃子：主規模離島の連携による保健事業充実のための試み（そのⅠ），第64回日本公衆衛生学会総会，北海道，2005年9月13日.

3) 流石ゆり子，牛田貴子，亀山直子，鶴田ゆかり，秋山小枝子，他5名：高齢者の終末期（end-of-life）のケアに関する看護職の悩み・困難，第2回日本高齢者虐待防止学会，東京都，2005年7月2日。（第2回日本高齢者虐待防止学会御茶ノ水（東京）大会抄録集p41，2005）

4) 牛田貴子，流石ゆり子，亀山直子，秋山小枝子，他5名：Y県介護保健施設における終末期（end-of-life）自己決定の現状，2005年日本看護学会看護総合，高松市，2005年7月7日.

(4) その他

1) 小田切陽一, 千田みゆき, 佐藤悦子, 村松照美, 流石ゆり子, 高橋美保子, 水戸美津子, 内田博之, 田中久恵, 藤江千歳, 山本美代子, 丸山久美子, 風間喜美子, 坂田由美子: 地域保健情報の地理空間解析システムの基盤構築と地域診断への応用. 平成14-16年度山梨県立看護大学共同研究費助成果報告書, 2005年3月.

2) 水戸美津子, 林滋子, 亀山直子, 松下由美子, 千田みゆき, 田淵和子, 遠藤みどり, 村松照美, 佐藤悦子, 登坂有子, 三井文子, 清藤和子, 泉宗美恵, 白鳥さつき, 梅宮きよ子: 看護職者の生涯学習ニーズとその支援状況-山梨県における調査-. 平成16年度山梨県立看護大学大学院共同研究費研究成果報告書, 2005年3月.

3) 小田切陽一, 内田博之, 水戸美津子: Age-Period-Cohort(APC)モデルによる高齢者死亡の推移分析と将来予測. 豊かな高齢社会の探求, ユニバーサル財団研究助成調査研究報告書, 2005年11月.

4) 水戸美津子, 野戸結花, 中谷久恵, 前川幸子, 猪股千代子, 奥原秀盛, 白田久美子, 栗原保子, 坂口千鶴, 多喜田恵子: 教育過程の評価はいかにあるべきか, 「看護系大学における教育評価体制の充実と教育改善」報告書, 2005年11月.

資 料

2005年度（平成17年度）年譜

平成17年	4月1日（金）	編入生オリエンテーション
	4月4日（月）	ガイダンス・授業開始（2・3・4年）
	4月8日（金）	入学式、オリエンテーション（1年）
	4月11日（月）	前学期授業開始（1年）
	4月14日（木）	オリエンテーション（1年）
	4月11日（月）～7月29日（金）	前学期実習（3年）
	4月29日（金）～5月5日（木）	春季休業
	5月14日（土）	自治医科大学創立記念日
	7月5日（火）～7月8日（金）	定期試験（4年）
	7月11日（月）～7月29日（金）	地域看護学実習（4年）
	7月26日（火）～7月29日（金）	定期試験（1・2年）
	8月1日（月）～9月25日（日）	夏季休業
	9月7日（水）～9月9日（金）	再試験
	9月26日（月）	後学期授業開始
	10月7日（月）～10月9日（日）	学園祭
	10月11日（火）～12月9日（金）	助産学実習（4年）
	10月17日（月）～10月28日（金）	基礎看護学実習Ⅲ（2年）
	11月7日（月）～11月11日（金）	基礎看護学実習Ⅳ（1年）
	12月2日（金）～12月22日（木）	成人看護学実習Ⅳ（2年）
	12月24日（土）～1月3日（火）	冬季休業
平成18年	1月24日（火）～1月27日（金）	定期試験（全学年）
	1月30日（月）～2月24日（金）	フィールド実習（3年）
	3月6日（月）～3月8日（水）	再試験
	3月10日（金）	卒業式
	3月22日（水）～	学年末休業

自治医科大学看護学部の概況（平成18年3月31日現在）

1. 教 員 数	43名
2. 学 生 数	418名
4年生（平成14年4月1日入学） （平成16年4月1日編入学）	106名
3年生（平成15年4月1日入学） （平成17年4月1日編入学）	108名
2年生（平成16年4月1日入学）	102名
1年生（平成17年4月1日入学）	102名

教職員名簿

1. 教員

職名	氏名	主要担当科目
学部長	野口 美和子	小児看護学
教授	川口 千鶴子	地域看護学
教授	篠澤 侃子	健康教育論
教授	高村 寿子	人体の構造と機能
教授	竹田 俊明	疾病と病態
教授	竹田 文俊	成人看護学
教授	中村 美鈴子	精神看護学
教授	永井 優子	母性看護学
教授	成田 伸子	基礎看護学
教授	松田 たみ子	老年看護学
教授	水戸 美津子	保健医療情報学
教授	渡邊 亮一	心身看護学
助教授	大塚 公一郎	精神看護学
助教授	西岡 和代	地域看護学
助教授	春山 早苗	成人看護学
助教授	水野 照美	小児看護学
講師	朝野 春美	成人看護学
講師	内海 香子	基礎看護学
講師	大久保 祐子	母性看護学
講師	大原 良子	老年看護学
講師	亀山 直子	地域看護学
講師	岸 恵美子	基礎看護学
講師	里光 やよい	成人看護学
講師	清水 玲子	老年看護学
講師	高木 初子	基礎看護学
講師	真砂 涼子	成人看護学
講師	山本 洋子	母性看護学
助手	稲荷 陽子	母性看護学
助手	岡本 美香子	母性看護学
助手	加藤 由香里	基礎看護学
助手	亀田 真美	基礎看護学
助手	川上 勝子	小児看護学
助手	黒田 光恵子	地域看護学
助手	佐藤 幸子	地域看護学
助手	鈴木 久美子	精神看護学
助手	関 澄子	小児看護学
助手	多田 敦子	精神看護学
助手	田中 京子	成人看護学
助手	棚橋 美紀	基礎看護学
助手	角田 こずえ	老年看護学
助手	林 美鳥	地域看護学
助手	舟迫 香子	成人看護学
助手	村上 礼子	成人看護学

(各職名ごとの50音順)

2. 事務部

職名	氏名
大学事務部長	平 純郎
大学事務副部長 (看護学部担当)	稲川 茂雄

(看護総務課)

課長	藍原 孝樹
課長補佐	半田 美治
係長(兼)	
主任主事	石 倭 ユリ子
主任主事	大澤 隆行
主事	松本 則子
主事	川村 仁美

(大学院看護学研究科設置準備室)

室長	藍原 孝樹
事務取扱(兼)	
室長補佐	半田 美治

(看護学務課)

課長	奈良岡 功
課長補佐	須藤 久男
係長	安島 幸子
主任主事	笠倉 昇
主事	松本 恵美子

編集後記

本号は、2005年4月1日から2006年3月31日までの1年間：平成17年度の自治医科大学看護学部の活動概要をまとめたものである。

本号の特別報告として、看護学部の完成年度にあたり、4年次学年担任を務めた母性看護学の成田伸教授に、看護学部1期生の卒業に向けての活動をご執筆いただいた。看護学部の初めての卒業生が、どのように卒業に向けて取り組んでいったのかを、学年担任として、また大学を卒業した先輩として温かく見守り導いていった道のりが示されている。自治医科大学看護学部卒業生の初めての社会への船出である。1期生という横の糸が、同窓会という縦の糸と結びつきながら、連続性を持って伝統が育っていくよう期待したい。

また、地域看護学の春山早苗教授に、自治医科大学附属病院看護部との共同による研究－派遣経験が看護実践能力にもたらす教育的意義の検討－についてご執筆いただいた。看護部との共同研究のプロジェクトは平成16年度後期から取り組みが始まったが、本格的な動きになったのは17年度に入ってからである。自治医科大学附属病院は、日頃から学部生の臨地実習フィールドとしてご協力をいただいている。共同研究の取り組みは、附属病院看護部と看護学部が連携を密にして教育・研究にあたることで、看護実践と看護学知識の発展と創造の新たな歴史を作っていることが期待される。

なお、2005年4月2日-3日に、日本ルーラルナースング学会設立記念の国際研究集会が開催された。設立の主旨や研究集会開催の内容については前号で取り上げたので、4月のことであるが掲載しなかった。

本号は、看護学部開設以来4年間編集委員長を務めた渡邊教授から、委員長をはじめ委員の半数が交替して発行する最初の年報である。1年間のことをそれぞれの領域にご執筆いただき、原稿を揃え・整え、1冊の年報を編んでいくことは、緻密さが要求される。今回は、前委員長が編集したような、完成度の高い緻密な年報とはなっていない部分もあろうかと思うが、新委員長のもと編集委員が共同して今後も取り組んでいきたい。

(副委員長：大久保祐子)

広報・編集委員会

委員長	高村 寿子	(自治医科大学看護学部 健康教育論)
副委員長	大久保祐子	(自治医科大学看護学部 基礎看護学)
委員	竹田津文俊	(自治医科大学看護学部 疾病と病態)
	水野 照美	(自治医科大学看護学部 成人看護学)
	真砂 涼子	(自治医科大学看護学部 基礎看護学)
	半澤 節子	(自治医科大学看護学部 精神看護学)
編集担当	石俣ユリ子	(自治医科大学 大学事務部 看護総務課)

自治医科大学看護学部年報 第4号

平成19（2007）年3月15日発行

発行者	自治医科大学看護学部 学部長 水戸美津子
編集責任者	自治医科大学看護学部広報・編集委員会 委員長 高村寿子
発行所	自治医科大学看護学部 栃木県下野市薬師寺3311-159 電話 0285（44）2111(代)
印刷所	(株)松井ピ・テ・オ・印刷 栃木県宇都宮市陽東5-9-21 電話 028（662）2511(代)